

勇気をもって霊の導きを

鈴蘭台福音教会 宮崎 浩



このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。 ローマ5・2

E・H・ピーターソンの著書『牧会者の神学』の中で次のような言葉があります。牧師の三角法（祈り・聖書・霊的導き）、その中で自分自身

欠けている霊的導きを深く考える機会が最近ありました。教会の葬儀や地域の方々との交わりの中で「昔、教会学校へ通っていたことがあります。」という声を何人かの方から聞いたことです。「やはり教会学校（CS）の働きが大切だ。」と思うのですが、その時は後何かが足りないのか、と思うのです。その中で霊的な導きを、牧師・役員・CS教師たちが本気でしてきたか、

自分に対しても示されたからです。

それに霊的導きは牧師任せになってはいないか。しかし、それは簡単ではない。サタンの攻撃をも受けるし、学びも必要です。私は母教会で当時森大牧師よりジョン・バニヤンの『天路歷程』の学び会をされた教会員たちの信仰の姿勢に求道者のとき影響を受けました。特にCS教師たちは霊的な信仰書を読むことが大切です。そして、各地でもたれる聖会に参加することです。霊的な成長を目指しつつ、勇気をもってCS教師たちがひとりの子どもたちに対して霊的導きをしっかりとっていくことで、正しい神観・聖書観を持ち、教会から離れることなく、信仰に固く立つ人が誕生するのではないかと思います。

私は今61歳になってJ・B・スミスの『エクスサイズ』をテキストに学び会を用一度スームで教会員としています。牧師も信徒も霊的導き手となるよう祈りつつ。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「旧約聖書丸ごと早わかり（4）」	4
サムエルとダビデ	15
キリストの譬え	21
預言者	51
牧羊ひろば（那覇平安教会）	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1. 原語について…ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

光の子として生きる

マテ5・8

●サムエルとダビデ

行事 テーマ

聖書

暗唱聖句

7月3日

愛の励まし

Iサムエル23・15〜18

同16節

●キリストの譬え

7月10日

親切なサマリヤ人

ルカ10・25〜37

同36節

17日

愚かな金持ちの譬え

ルカ12・13〜21

同15節

24日

迷子の羊

ルカ15・1〜7

同4節

31日

放蕩息子

ルカ15・11〜24

同24節

●預言者

8月7日

パリサイ人と
取税人

ルカ18・9〜14

同14節

8月14日

エリヤ①
生きて働かれ
る神

I列王17・1〜16

同1節

21日

エリヤ②
火をもつて答
える神

I列王18・20〜40

同24節

28日

エリヤ①
霊の二倍の分

II列王2・1〜15a

同9節

9月4日
ラーテ

エリヤ②
器と油

II列王4・1〜7

同3節

11日

エリヤ③
ナアマン將軍
の癒し

II列王5・1〜14

同13節

18日

神に背いたヨナ

ヨナ1・1〜17

同9節

25日

エレミヤへの
召し

エレミヤ1・1〜10

同9節

旧約聖書丸ごと早わかり(4)

鎌野 直人



はじめに

今回は、旧約聖書の詩歌と呼ばれる五書の概略を学んでいきましよう。

これらの五書は一般に「詩歌」としてひとまとめにされますが、本来の意味での「詩と歌」が綴^{つづ}られているのは詩篇および雅歌のみです。箴言、ヨブ記、伝道者の書は「知恵文学」と呼ばれ、神が主権者として支配しておられる世界で、いかに生きるべきかを教え、考えさせる書です。一方で、箴言、雅歌、伝道者の書の三つは、イスラエルの王ソロモンとの深いかわりを持つ書としてまとめられることもあります。

I ヨブ記

(内容)

ウツという誰^{だれ}も知らない遠くの地に、はるか昔住んでいたヨブの上に起こった出来事と、その後のヨブ、その友人たち、そして神の激論が本書に記されています。「苦しみには理由があるのか」という重いテーマを取り扱いつつ、「主は一体どのような方であるのか」について考えさせる書です。(分解)

1 プロローグ(1～2章)

「誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっていた」(1・1)歩みをしていたヨブは、十人の子どもと数多くの財産を所有していました。子どもに対しては過保護

なヨブでしたが（1・5）、神の前に完璧かんぺきと思えるような歩みをしていました。

義人ヨブを巡って、天にある神の議会で議論が起こりました。サタン（訴える者）の意は「ヨブはいたずらに神をおそれるのではなく、何かの報いを求めて主に従っているのだ」と主に訴えました。そこで、主はヨブのすべての所有物を奪う許可をサタンに与え、その結果、ヨブに属する家畜、しもべ、子どもたちすべては奪われてしまいます。

そのような状況にあっても、主をのろわず、罪を犯すことをしなかったヨブを見た時、サタンはさらにその要求をエスカレートします。彼は、「ヨブ自身の肉体を撃つてみよ」と主に申し出ました。そこで、ヨブのいのちを奪わないとの条件付きで、主はサタンにヨブの肉体を撃つことを許され、その結果、ヨブは病に倒れました。理由なくヨブが撃たれたのを見た彼の妻は、「神を呪って死になさい」とヨブをあざけります。しかし、ヨブはそのくちびるをもつて罪を犯しはしませんでした。

2 ヨブと友人との対話（3～27章）

三人の友人（エリファズ、ビルダデ、ツォファル）が苦難にあったヨブを慰めようとやってきました。しかし、ヨブ

の最初の言葉（3章）に対する彼らの議論は、もはや慰めではなく、訴追となっていました。4章から28章にかけて、ツォファル以外の友人が三回ずつ、そしてツォファルだけが二回、ヨブに語り、それぞれに対してヨブが反論しています。

ヨブは、その最初の訴え（3章）で自らが誕生した日のろっています。「その日が暗くなるように」と訴えることにより、すべてが暗闇くらやみに包まれることのみならず、神が造られた世界の秩序が完全に崩れてしまうことを彼は願いました。また、今生かされていることを彼は嘆き、死を望みました。神がそのいのちをあえて保ったこと（2・6）をヨブは知らなかったのです。ヨブはなぜそこまで嘆いたのでしょうか。「自分自身のような正しい者が苦しむと言うことは、この世界にはもはや秩序は存在しない」と理解したからです。つまり、神が造られた世界には倫理的な秩序は存在しないとヨブは考えたのです。

ヨブの嘆きに対して、友人たちは「神は正しい者に祝福を与えられる、罪を犯した者に災いを与えられる」と確信していました。ですから、ヨブの苦難を見て、「ヨブは隣人に対して罪を犯したから、このような苦しみにあっている

にちがいない」と断定しました。けれども、ヨブは自分が何の罪も犯していないことを知っていましたから、当然自らの潔白を主張し続けました。

ヨブと友人たちの議論を注意深くたどっていくと、友人たちはただヨブに向かって議論をふっかけていますが、ヨブは友人たちに反論するだけではなく、神に向かって祈っていることに気が付くでしょう。徹底的に自分を痛めつけている神に対して、この苦しみを取り去るようにとヨブは嘆きました（たとえば7・11～21）。理由なき苦難を経験したゆえでしょうか、ヨブはもはや神を恐れてはいません。大胆に、そして率直に自らの主張を神に向かって投げ続けました。それでは、神に対してヨブは何を訴えたのでしょうか。神は勝手気ままに自らの思いを実現しておられる、神はこの世界を秩序ある世界としては保っておられない（21・7～34など）、だからそのような神と何とか話をしたい（13・22）、そして「私を贖う方」^{あがな}（19・25）と呼ばれる仲保者がほしい、という点がヨブの訴えの中心でした。残念ながらヨブとその友との対話は全くかみ合っていない。それは、誰一人として1～2章に描かれている神の議会での問答を知らないからです。「ヨブは理由なく苦難

にあっている、ヨブは神のあわれみのゆえに命を保たれている」ことを友人が知っていたなら、その議論はここに書かれているものとは違っていたでしょう。ただし、ヨブは自分が潔白であることは自覚していますから、彼の語りは徐々に真実に近づいていきます。

3 ヨブの最後のアピール（28～31章）

ヨブの最後の訴えの直前に、知恵に関する詩が挿入されています（28章）。知恵を見いだすことは、貴金属を採掘することと同様に困難です。しかし、「神は知恵の道をご存知であり、神こそ、それがあつ場所を知っておられる」（28・23）、だから神に求め続けるべきなのです。確かにヨブは苦しみの中から神に訴え、神から知恵をいただくとした。しかし、「神を恐れて悪から遠ざかっていた」と言われていたヨブもまだ知恵を自分のものとはしていませんでした（28・28参照）。本書の最後で嵐の中から応えられる主に出会ってはじめて、彼は本当の知恵を獲得する、すなわち本当の意味での神を恐れ、悪から遠ざかることを自らのものとしはじめるのです。

この詩に続いて、ヨブは神に対する最後の訴えを述べ、彼の議論は終わりました（29～31章）。

4 神のために語るエリフ (32～37章)

ヨブと三人の友人たちの議論が終わった後、エリフは「神のために」(36・2)語りはじめます。彼は、世界の王である神ご自身が世界のさまざまな働きに直接関わっておられる、しかし、神は悪を行わず、偏り見ることもないが、「私たちの知り得ない大きなことをされる」(37・5)方である、と述べました。彼のことばは、続く神の答えに対する準備と考えることができます。

5 神のヨブに対する答え (38・1～42・6)

神が嵐の中から現れ、ヨブに直接答えられます。しかし、主はヨブの疑問に対する回答を与えられた訳ではありません。神が造られた世界の姿を述べることによって、ヨブの無知と人の考えを超えた神のみわざを示しています。

神はあらゆるものに何らかの境界線を定められる方です。しかし、すべてをがんにがらめに縛るのではなく、境界線の内側にある限り、ある程度の自由を神は与えられています(38・10)。また、人から見たら無駄とも思えるような行動をも神は起こされます。そして、愚かに思えるような存在をも喜び、自慢されます。「人のいない地、人間のいない荒野に雨を降らせ、荒れ果てた廢墟の地を満ち足らせ、

それに若草を生えさせる」(38・26～27) 神の姿は、効率を考える人間の対極に位置するでしょう。ヨブはこのような神の姿を知りませんでした。

「神をおそれ、正しく歩んでいた自分は神の創造物の頂点にある」とヨブは考えていました。だから自分の苦しみの理由を神に求めたのです。しかし、ヨブは間違っていました。神から見ると、被造物の間に優劣はありません。人から見て愚かに思えるような存在さえも神は自慢しておられるからです。この人間の価値観を越える神の姿にヨブは気付き、今までの考えを捨てると告白しました(42・6)。

6 エピローグ (42・7～17)

あらゆる面において正しかったわけではありませんが、神に向かって祈り続けたその姿勢のゆえに、「ヨブは神について正しいことを語った」と認められました。そして、主はヨブの繁栄をもとに返し、すべての財産を二倍にされました。

ヨブはこの苦難を通して知恵を獲得し、本当の意味で「神を恐れる」ようになりました。いつ失うかも知れない財産を、主からもう一度受けたからです。危険を承知の上で、喜んで受け、それを今度は喜んで他者に与える存在にヨブ

は変わりました。そして、神がその被造物を誇ったように、自分の子どもたちを喜ぶ者にヨブはなりました。1章に描かれていた過保護のヨブの姿はもうありません。「神のようには歩む」、つまり「自由と喜びをもつて生きる」という意味で神を恐れる知恵をヨブは獲得したと言えるでしょう。

Ⅱ 詩篇

(序論)

詩篇は150篇の詩からできています。ここに収められている詩の多くは、エルサレムの神殿での礼拝において読まれ、祈られたものです。一方で、詩篇ほど変化に富んだ書は他にはありません。詩の長さの違い（最長の119篇は176節、最短の17篇は2節）にとどまらず、その内容の幅の広さは驚くばかりです。ここでは詩篇全体の持つメッセージを概略し、それに続いて比較的頻繁に出てくるいくつかの詩のジャンルについて述べることにします。

(詩篇全体のメッセージ)

詩篇全体は五つの巻に分けられています。第一巻は1～41篇、第二巻は42～72篇、第三巻は73～89篇、第四巻は90～106篇、第五巻は107～150篇です。これは律法（五書）に

倣^{なま}つていられると言われています。それぞれの巻は「主はほむべきかな」と、主への賛美をもつて終わっています。更に詩篇全体も「主」をほめたたえよ（ヘブル語で「ハレルヤ」が繰り返される詩篇で終わっています（146～150篇）。このように、詩篇は主をほめたたえる賛美の書です。けれども、詩篇には賛美の歌以外にも様々な歌が含まれています。たとえば、主への嘆きの祈りや、主への感謝の歌や、律法についての歌です。ですから、詩篇を単なる「賛美」の書と考えることもできません。それでは、どのようなメッセージが150の詩に流れているのでしょうか。

詩篇のテーマの一つは、主が立てられた王が危機に瀕^{ひん}していることです。このことは、イスラエルを代表する王であるダビデの歌を通して描かれています（2、3篇など）。敵が立ちあがる中、王は主に祈り、主に信頼し、主の救いを待ち望んでいます。しかし、現実には願っていたようにはなりません。第三巻の最後を見ると、「あなたは拒んでお捨てになりました。あなたは激しく怒っておられます。あなたに油注がれた者に向かつて」（89・38）と詩人は主に對して祈っています。都は荒れ果て、王位は奪い取られ、もはや希望もないような状態にイスラエルは陥っています。

それではイスラエルとその王への救いはどこから来るのでしょうか。「この世界のまことの王は人ではない、神である」という信仰こそ、救いの源泉であり、詩篇の告白する信仰の中心です。まことの王である主が、公正と正義によつて正しい支配をなされる時(95・3)、「世界は堅く据えられ揺るがない」(96・10)現実が世界に満ちます。そして、主こそがまことの王なのですから、「主」のおしえを喜びとし 昼も夜も そのおしえを口ずさむ」(1・2)生き方を選択するように主の民は招かれています。このように、王である主に律法を通して従うことこそ救いの道である点が、本書の二つ目のテーマです。

それでは、民の救いは具体的にはどのようなにもたらされるのでしょうか。それはダビデの子、救い主(メシア)を主がもう一度立てられることによつてです(132・17〜18)。この救いを目の当たりにした時、民は主をほめたたえます。このように、ダビデの子による救いの到来こそ詩篇の三つ目のテーマです。

(様々な詩のジャンル)

詩篇に含まれている歌はいくつかのジャンルに分類することが出来ます。そこで、主要ないくつかのジャンルにつ

いて考えてみましょう。

1 賛美の歌

詩篇には多くの「賛美の歌」が含まれています。そこでは主のすばらしいみわざ、たとえばイスラエルを創造されたこと(100篇)、世界を創造されたこと(104篇)、歴史を導かれること(33篇、103篇)がほめたたえられています。

賛美の歌には三つの特徴があります。まず、周りの人々への呼びかけから始まります。たとえば、「すべての国々よ」「すべての国民よ」(117・1)と、周りにいる人々が共に主を賛美するように詩人は呼びかけます。次に、主への賛美そのものである命令、「主」をほめたたえよ(ヘブル語で「ハレルヤ」)(117・1)の言葉が続きます。三つ目に、賛美の歌には主を賛美する理由が書かれています。たとえば、「主の恵みは私たちに大きい。主」のまことはとこしえまで」(117・2)という主の姿に対する感謝が賛美の理由です。

2 律法の歌

律法に関する歌の中で最も有名なものは119篇です。ただし「律法の歌」と言っても、旧約聖書の律法の内容を教える歌ではありません。「主のおきて」の素晴らしさを訴える歌のことをこのように呼んでいます。更に、良い人生、喜び

ある人生を歩むための秘訣が律法の歌には語られています（1篇、19篇）。また、37篇では悪しき者が栄えている現実にとどのように向き合うべきなのが教えられています。このように、賛美と祈りを集めた歌集としてではなく、「人生の取り扱い説明書」として詩篇を読む必要があります。

3 祈りの歌

敵に囲まれたり、病の中にあったり、捕囚の中にあったり、と困難な中にいる詩人が主に向かって叫んだ祈りが詩篇には多く含まれています（たとえば13篇、31篇、42〜43篇など）。そして、神なしでは生きていることのできない、弱く貧しい者の主への信頼に立つ叫びが、そこには綴られています。なお、祈りには個人の祈り（「わたし」の祈り）と共同体の祈り（「わたしたち」の祈り）があります。

祈りの歌にはいくつかの特徴があります。まず、詩人は祈りの対象である主に向かって声をあげます（142・1〜2）。次に、自らの陥っている状況を主の前に告白しています（142・3〜4）。主が働いておられない、と思えるような現実ですが、詩人は「あなたこそ私の避け所」（142・5）と主への信頼を告白します。そして、困難な状況から彼を救い出してくださるように主へ乞い願います（142・6〜7）。最

後に、主が祈りに答えてくださった時、感謝をささげるところを約束しています（142・7）。なお、祈りの中で「なぜ聞いてくださらないのですか」と詩人は叫んでいます。主への信頼は変わりません。深い信頼に基づいて、大胆に主に向かって叫んでいるのです。

4 感謝の歌

困難の中で主に祈った祈りが聞かれ、そこから救い出された時、主への感謝がささげられます。詩篇の中には主から救い出されたことへの感謝を歌った詩があります（たとえば32篇、107篇など）。

感謝の歌は祈りの歌と構成が似ています。主への叫び、困難の告白、主への信頼の告白、誓いの言葉という祈りの歌の要素が、多くの感謝の歌には含まれています。しかし、感謝の歌には、主が祈りに答えてくださったことが「証し」として叙述され（30・1〜3、11）、感謝と賛美のことが加えられています（30・4〜5、11〜12）。

感謝の歌には信仰者の歩みが映されています。感謝の歌も信仰者の生涯も、主への嘆きの祈り、祈りに応えられる主の恵みのみわざ、そして主への感謝の繰り返しからできているからです。なお、22篇を祈りの歌に分類することが

ありますが、22節以降は主への感謝と証^{あかし}の言葉です。ですから、これは主への感謝の祈りに分類すべきでしょう。

Ⅲ 箴言

(内容)

本書は「イスラエルの王、ダビデの子ソロモンの箴言」(1・1)と記されていることからわかるように、知恵を求め、知恵を説いたソロモン王(1列王3・4章)と深いかわりがあります。しかし、すべてがソロモンによって書かれたのではなく、イスラエルの長い歴史の中で語られ、集められ、また他国から輸入された知恵のことばから本書は構成されていると考えるべきでしょう。

(分解)

1 箴言の目的(1・1〜7)

知恵を自分のものとするために、人は箴言を学びます。しかし、知恵は知的なものに留^{とど}まってはけません。むしろそれは全人格的な美徳です。人格が整えられることによって、人生を上手に操縦する方法を学び取っていくからです。誰が知恵を学ぶべきでしょうか。「思慮のない者」、まだ知恵を習得していない人は箴言を学ぶべきです。しかし、

「知者」と呼ばれるほど知恵を蓄えた人でも「学に進む」必要があります。つまり、どのような人も一生知恵を学び続けるべきである、と箴言は訴えています。

知恵を学ぶための最も基本的な姿勢は何でしょうか。それは「**主**」を恐れることです(1・7)。神に恐怖心を抱いて生きることではありません。主なる神こそこの世界のすべてを支配しておられる方であると認めることです。ですから、単なる「世の中を上手く過^えす方法」ではなく「神が生きて働いていておられる世界でどのように生きるか」を箴言から学ぶことができます。

2 知恵を学ぶ方法(1・8〜9・18)

両親が息子に向かって知恵をどのように学べばいいのかを語りはじめます。両親が語り伝える知恵のことばに耳を傾け、それによって自らを飾^えるならば、知恵を会得できると親は語っています(1・8〜9)。しかし、知恵を獲得することを邪魔する者たちが息子の周りには多くいます。悪い友人たち(1・10〜19)や不倫へと誘う女性(5章など)です。しかし、このような人々の誘いの声に打ち勝ち、むしろ主の天地創造のわざに関わった知恵の声に息子は従うべきだ(8章など)と、説得のことばが続きます。

3 格言集 (10・1～30・9)

箴言の中心に当たるとこの部分には様々な格言が集められています。そこでは、家族と友情、ことば、主を恐れる歩み、社会における公正と正義、国家と王、富と貧困など、人生を歩む上で必要な、多種多様な事柄が取り扱われています。

4 有能な妻 (31・10～31)

箴言は「有能な妻」(31・10〔新共同訳〕)の姿をもって閉じられています。これを両親から知恵の教えを受けた息子がめとった理想の妻の姿と考えることができます。彼女の働きは多岐にわたります。家庭に必要なあらゆるもの(衣料、食料、農事)の準備、その管理、町の門で裁きを司る長老となった夫への援助(31・23)などがあげられています。これほどの働きをすることができるのは、彼女が主を恐れることによって生きているからです(31・10)。両親の伝える知恵を学び続ける者に、主が約束された豊かな祝福の一端を有能な妻は表しています。

IV 伝道者の書

(内容)

「空の空」(1・2)で始まり、終わる伝道者の書(「伝道

の書」「コヘレトの言葉」)は、神の絶対主権の下にある無力な人間が、不確かなこの世界などで、どのように生きるべきかを物語っています。箴言同様に、ソロモン王との結びつきがあるとされています。しかし、彼の名は記載されておらず、ただ「エルサレムの王、ダビデの子、伝道者」(1・1)と自らを呼んでいるに過ぎません。なお、「伝道者」と訳されている語はヘブル語で「コヘレト」と言い、集会で人々に語り聞かせる人を指しています。

(分解)

1 王の探求と失敗 (1～3章)

王であり、知者であり、富を蓄えた伝道者は、いつまでも残る益を探求しました。しかし、彼の努力はむなしく終わり、王であることも、知恵あることも、蓄えた富さえも、いつまでも残る益を彼に残してはくれません。それはすべての人が死ぬべき運命にあり、死があらゆる益を人から奪い取るからです。ただ、神が与えてくれる喜びのひと時だけが、伝道者の心を和ませるものでした。

2 富の限界 (4・1～6・9)

富に関して伝道者は観察し、考察を加えます。富を獲得するために孤独になってしまう現実、満足することのない

人の欲望、蓄えた富さえも自分のために用いられない悲劇を目の当たりにした時、富は決して人にいつまでも残る益を残さないことが明らかになります。その一方で、神殿で礼拝するにあたって、全権者である主を恐れる生き方を送るようにと勧められています。

3 知恵の限界（6・10～9・10）

知恵あることは、愚かであることよりも、確かに勝^{すぐ}れてはいます。しかし、神が治めておられるこの世界の現実を鑑^{かん}みる時、知恵さえもその輝きを失っていることに気がつきます。なぜならば、どれだけ知恵があつたとしても、人は将来起こること、特にみずからの死を完全に予測することができないからです。そのような人生であるからこそ、今、与えられた時を生かし、主が与えてくださった喜びのひと時を最大限に活用すべきです。

4 知恵ある歩み（9・11～12・8）

富にも知恵にも限界のあるこの世界で、生きるためにはどうすればいいのでしょうか。時を完璧にとらえることができない現実を受け入れた上で、気前よく隣人に与え、機会を逃さずに歩むことを伝道者は勧めています。この世界を治めておられる創造者である神を心に留め、その方を計

算に入れて、生かされているこの時を存分に生きるならば、限界の多いこの世界でも、幸せに過ごすことができます。

5 エピローグ（12・9～14）

本書のほとんどの部分は、伝道者一人の語りで占められていました。しかし、エピローグはそうではありません。記者は伝道者が知者であつたことを記した後、主を恐れ、主の律法に従うことこそが、人の本分であることを読者に命じて、本書の幕を閉じています。

V 雅歌

（内容）

雅歌は羊飼いの村に住む男女の愛の歌です。このような歌が聖書に含まれているのは、男女間の情熱的な愛を神は軽視しておられず、むしろ、それを素晴らしいものと認めておられるからです。その一方で、ユダヤ人は雅歌にイスラエルへの神の愛が歌われていると、クリスチャンは教会に對するキリストの愛が記されていると理解してきました。様々な解釈がありますが、ここでは男女間の愛の歌ととらえて、概要を考えてみましょう。

(分解)

翻訳ではわかりにくいのですが、本書はおとめ、女たち、花婿、男たちが交互に呼びかけ合う構成をとっています。

第一部(1・2・2・7)では、そばにいない愛する人を慕う女性の歌に続いて、花婿、さらにはおとめがお互いの美しさをファオの戦車の雌馬めうま、よい香りのする花、リンゴの木にたとえて歌っています。第二部(2・8・3・5)では、まず、花婿から誘いのことをかけられたことをおとめが述べています。それは、冬が去り、春がやって来たからです。この誘いに彼女は応え、夜、花婿を探し求めます。当初、彼は見つかりませんでした。しかし、最後には彼女は彼を見いだします。

豪勢な乗り物に乗って花婿が結婚の宴に到着する様子から、第三部(3・6・5・1)は始まります。彼はおとめの「美しく…何の汚れもない」(4・7)姿をほめたため、彼と共に歩むようにおとめを招きます。そして、彼女の愛と彼女のかおりの素晴らしさをほめたためです。ところが、おとめは応えることができません。第四部(5・2・6・3)の冒頭で、花婿が彼女の家の戸をたたく音でおとめは目を覚まします。あわてて起きて、戸を開けた時、没葉の香り

だけを残して、彼は去ってしまいました。彼女は彼への愛に病んでいることに気づき、花婿の麗しさを様々な宝石にたとえて語ります。そして、自分は野で群を飼っている彼のものだ、と告白するのです。

おとめの声に応え、第五部(6・4・8・4)では、王妃やそのそばめたちよりも、おとめのほうが美しいと花婿はほめたためです。彼女も彼と共にいることを夢見ます。そして、シオンの女たちはおとめの姿の美しさを歌い、花婿もおとめとの口づけを思い、彼女への思いを叙述します。おとめもぶどう園に行き、彼と共にそこにいて、彼に抱かれることを願うのです。そして、第六部(8・5・14)において、愛の力をほめたため、愛する者がすぐさま自分の所に来ることを願いつつ、雅歌はその幕を閉じます。

参考文献 LaSor, *Old Testament Survey*, 2nd ed.

(※「牧羊者・二〇〇七年度I巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。)

聖書

Iサムエル23・15～18

タイトル

あなたから神様の励ましが流れる

暗唱聖句

サウルの息子ヨナタンは、ホレシユのダビデのところに行つて、神によってダビデを力づけた。
Iサムエル23・16

目標

神の心を知って、友を励ます者となる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、人を励ますほうですか？ それとも励まされるほうですか？ 苦しい時や悲しい時に友達から励まされたことがあるでしょう。その時、どんな気持ちでしたか？ 私たちの周りには励ましを必要としている人がたくさんいます。どのように励ましたら良いでしょうか。

ダビデを守られる神様

人のねたみというものは本当に恐いです。ダビデをねたむサウルは、ダビデを何とか殺そうと彼をしつこく追いつけます。ヨナタンはダビデと約束した通り、石の陰に隠れていた彼を矢の合図をもってサウルの手から逃がしました。難を逃れたダビデは、祭司アヒメレクの所にきました。そこで祭司から、以前倒したゴリヤテが

持つていた剣を受け取り、ガテの王アキシユの所へ行きました。しかし、家来たちが「この人は、サウロよりも強いと評判のダビデではありませんか」と言い始めます。それを聞いたダビデは、アキシユがサウルのように自分の命を狙うかもしれないと思ったのかアキシユを恐れて、王の前で気が変になったふりをし、そこを去って行きました。そして、ダビデはアドラムのほら穴に逃れるとそれを聞いた兄弟や父の家の者たち、そして貧しい者や困っている者達が彼の所に集まってきました。その数は、四百人ほどになりダビデは、そのリーダーとなりました。サウルは、祭司アヒメレクがダビデの味方をしたと思い、祭司ら85人を殺してしまつたのです。この所からサウル王のダビデに対するねたみがどんなに強いものであるかが分かります。サウルは毎日逃げているダビデを探し求めましたが、神様はダビデをサウルの手から守られました。神様に守られるほど安心なことはありません。

ダビデを励ますヨナタン

ダビデはサウルが自分の命を狙って来るのを聞いて、恐れしました。するとそこにヨナタンがダビデの所にやってきました。サウルにとってヨナタンとの再会はどう

なに心強かったでしょうか。ヨナタンもダビデが逃げてから心配をしていたに違いありません。恐らくヨナタンは神様に導かれてダビデの所に來ることが出来たのでしょう。ヨナタンはダビデを心から愛していました。彼らは互いに抱き合って再会を喜んでいました。そして、ヨナタンはダビデを力づけたのですが、それは自分の言葉や行動ではなく神様によってでした。ヨナタンはダビデと自分の間にいつも神様がおられて守って下さると信じていたのです。また、ダビデの心を守り、励ますことが出来るのは神様以外にない事を知っていたのです。そしてヨナタンはダビデがサウルから守られ、そして、イスラエルの王となる神様の御旨を告げたのです。恐れているダビデにとってこれほど嬉しく励まされることはなかったでしょう。

私たちを励まして下さる神様

私たちもダビデのように苦しい時や恐れてしまう時があります。しかし、ダビデにヨナタンを通して力を与え励まされた神様は、私たちをも励まして下さるのです。その方法は、1つはみ言葉によつてです。「みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます」(ヤコブ

1・21)とあります。神様の御言葉によつて私たちは励まされ力が与えられます。2つ目は、お祈りによつてです。神様にお祈りをするとき神様は私たちの心を守り力を与えて下さいます。聖書に「下には永遠の腕がある」(申命記33・27)とあります。神様は私たちがどんなに落ち込んだとしても力強い御手を持って支え「大丈夫だよ。私が守るよ」と励まし続けてくださるのです。

まとめ

ヨナタンは苦しい中を通つたダビデを神様によつて励ましました。神様の励ましを体験したダビデは心強かつたことでしょう。私たちも神様の励ましを体験させて頂きましょう！神様から励まされると「神様は生きておられるから大丈夫だ」と神様をますます信頼するようになります。そして、落ち込んでいるお友達に「大丈夫だよ。神様は共に居て助けて下さるから。」と声を掛けることができます。皆さんの周りには神様の励ましを必要としている人がいませんか。神様は多くの人を守り励ましたいと願っておられます。そのためにあなたを用いられます。

♪イエスさまについていこう♪(ホ117、イン82)

聖書 Iサムエル23・15・18 テーマ 愛の励まし

序論

(鎌野善三)

先週(6月26日)学んだ聖書箇所から今週までの21・23章には、サウル王から逃れるために、ダビデがあちこちを放浪している姿が描かれている。特に、イスラエルの敵であるペリシテ人の町ガテへ逃げていったのは奇妙に思われるが、イスラエル領内ならばどこへ逃げても駄目だと考えたからだろう。だがそこも安全ではなかった。その後、アドラムの洞穴ほらあなにのがれ、そこにダビデ親派が数百名も集ってきたことによって、ダビデは少し安心したかもしれない。しかし、サウルは執拗しつようにダビデを追いかけた。彼らはあちこちを転々と逃げ回るしかなかったが、ダビデは決して自分からサウルに戦いをしかけようとはしなかった。このことは、特に注目しなければならぬ。ちょうどその頃ころ、ダビデを大いに励ます出来事が起こった。

一、最悪の時期に

今週のテキストの直前には、最悪の事態が起きていた

ことを記している。ダビデとその従者は、エルサレムから約30キロメートル南西にあったケイラの町の住民を、ペリシテ人の侵略から救い出した。しかしそんな住民でも、サウルがやってくるならば、無情にもダビデを引き渡すという厳しい言葉を主から受けたのである。そこで彼らは、ケイラから南東15キロメートルほどの所にあるジフの荒野に逃げ出した。(ダビデは、サウルが自分のいのちを狙って、戦いに出て来たのを見た)(口語訳では「ダビデはサウルが自分の命を求めて出てきたので恐れた」と記されているように、それこそ四面楚歌しめんそか、八方ふさがりの状態で、非常に恐れていたのである。

私たちの人生にもそのような時期がある。病氣や事故、人間関係のもつれや事業の失敗などがたて続けに起こることを経験した人もあるだろう。そんなときには、「神様、なぜこのようなことがおこるのですか」と涙ながらに訴えるしかないのだ。しかし、主は決して無意味にそのような目に遭わせられるのではない。

二、最良の友人が

その時、ヨナタンはサウルより早くこの荒野にやってきて、ダビデを捜し出したのである。そして(神によつ

てダビデを力づけた」。ダビデはどれほど嬉しかったことだろうか。「遠い国からの良い消息は、疲れたたましいへの冷たい水」(箴言25・25)、「友はどんなときにも愛するもの。兄弟は苦難を分け合うために生まれる」(同17・17)などの聖句が思い起こされる。

教会の中に、そのような励ましを与えてくれる友人がいる人は幸いである。もちろんクリスチャンでない友人も貴いものだが、同じ主を信じている者なら、より一層の力になる。悩んでいたときに、聖書の言葉を送ってくれた友人のことは、生涯忘れることはないだろう。

三、最善の解決を

〈神によって力づけた〉とは、神の御旨を彼に語ったことである。〈恐れることはありません。父サウルの手が、あなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう〉と、ダビデが次の王となることを明言したのだ。ダビデから恐れを除いてくださるのは、神ご自身だと、ヨナタンは確信していた。

ここに至る経緯の中で、ヨナタンは神の御旨を悟ることができた。そして、たとい自分が王位継承権をもつて

いたとしても、神の御旨を受け入れることのほうが大切だと認めたのである。〈父サウルも、そうなることを確かに知っているのです〉と彼は言う。しかしサウルは、このことを受け入れず、いたずらにダビデを追い回していた。神の御旨に従うよりも自分の王権を必死で守ろうとする父の姿を見て、ヨナタンは心を痛めていたに違いない。彼は、神と父のはざまに立って苦しんでいた。

実はこれがダビデとヨナタンが会った最後の時となった。その数年後、サウルとヨナタンはペリシテ人との戦いで死ぬ(31・1～7)。御旨に逆らい続ける父であつても、ヨナタンは父に従って死を迎えたのである。その時まで「御旨に従うように」と父に言い続けたかどうかは定かでないにしても、本当の解決は神の御旨に従うことだという確信を、ヨナタンは明確に持っていた。

結論

ヨナタンの愛の励ましは、神の御旨を受け入れていたからできたことである。私たちも聖書を通して神の御旨を知ることができる。大切なのは、その御旨に従って、神と人々に仕える生活を送ることである。そう生きることができたらだろうか。

研究資料

(中島啓一)

執拗^{じつごう}に追うサウルと必死に逃げるダビデ。この緊迫した追跡劇のはざまに、ダビデとヨナタンの最後の面会の場面がある。サウルの魔の手は幾度もダビデのすぐそばにまで迫ったが、「神はダビデをサウルの手に渡されなかった」(14)。一方で同じ神がペリシテ人をダビデの手に渡され(4)、また後にサウルをダビデの手に渡された(24・10)。このように神はご計画の中でいつもダビデを守り、導かれる。これが一連の物語を貫く思想である。彼の従者たちが恐れおののく時も、ダビデはこの信仰に堅く立って勇敢に振る舞った(1～5)。しかしさすがのダビデも、つらい逃亡生活の中で大きな恐れに包まれる時がやって来た。そんな時、彼のもとに来て、主に愛の励ましを与えたのがヨナタンであった。

テキスト

15 ジフの荒野のホレシュ ジフはユダの町の一つで(ヨシユア15・55)、ケイラから約20km南東。このジフから約3km南にあるホレシュ(「樹木の茂った高地」の意)で、ダビデとヨナタンの最後の面会が行われた。

16 ヨナタンは…ダビデのところに行って ヨナタンはどうやってダビデの居場所を知り、サウルの目を逃れ、ホレシまで旅をしたのか、テキストは全く触れていない。しかしその詳細をあえて省いていることが余計に、一連の物語を貫く思想をはっきりと浮かび上がらせる。すなわちヨナタンは神の計画の中で、神に遣わされて、ここに来てきたのである。神によってダビデを力づけた「力づけた」は直訳すると「手を強くした」。イザヤ35・3「弱った手を強め、よろめく膝をしつかりさせよ」でも同様の表現が用いられている。この励ましは、救いは神から来るといふ信仰に基づいてこそ効力のある励ましである。以下にこの愛の励ましの具体的な内容が続く。

17 恐れることはありません 同じ表現(創世記15・1「恐れるな」等)が旧約にはひんばんに登場し、その多くは主によって語られ、さらに救いの宣言や約束がそれに続く。この場合は、ヨナタンによって語られているが、ダビデの恐れに対する主からの明確な応答である。そしてそれに救いの約束が続く。父サウルの手が、あなたの身に及ぶことはない ヨナタンは、サウルの継続的かつ執念深い搜索(14～15)にもかかわらず、その手はダビ

デに届かないことを主にあって保証した。あなたこそ、イスラエルの王となり ヨナタンは、以前にすでに皇太子のローブをダビデに与えることによって、実質的には王位継承権をダビデに譲ることを表明していた(18・4)。さらにその後の行動もその意志に基づくものであったが、はつきりとそのことを言葉に表したのはこれが最初であった。私はあなたの次に立つ者となるでしょう「王に次ぐ人(者)」という表現は、Ⅱ歴代28・7(エルカナ)、エステル10・3(モルデカイ)に見られる。皇太子ヨナタンはその王位継承権をダビデに譲って、自分は全くダビデを支える側に回る覚悟をはっきりと示した。ただしこれは、ヨナタンの悲劇的な夭折(31・2)によって実現を見なかった。父サウルも、そうなることを確かに知っている ヨナタンは、サウルもまた「将来」がダビデに属していることを知っていると語る。この証言はダビデの即位の正統性を力強く保証するものである。しかし実際にサウルがそう語ったとは、ここまでのところ記録されておらず、サウルがそのことを公に口にするのは24・20まで待たなければならぬ。だが、サウルがすでにそのことを知っていることをヨナタンは察してい

た。サウルは自己防衛のために、公にも、自分に対して、それを認めることができなかったのである。

18 二人は「主」の前で契約を結んだ ここでダビデとヨナタンは、主の臨在の前に相互的な契約を結んだ。周知の通りダビデとヨナタンはすでに契約を結んでいた(18・3等)。その上で改めてここで契約を交わしたことは、私たちの文化から見れば信頼関係がないように思えるかもしれないが、決してそうではない。真実に信頼し合い、愛し合う友人同士にとって、このような契約は、どれだけ繰り返しても、多過ぎることはないのである。

ヨナタンはいつものようにダビデに真実を尽くし、恐れの中にある友に主にある愛の励ましを届けた。人間的な見方をするならば、ダビデの台頭で最も多くを失ったのが他ならぬヨナタンであった。しかしこの王位を継承するはずであった者は、喜んでその権利を親友に譲り、自分は裏方に回る道を選んだ。ダビデもまた変わらぬ真実をその友と彼の子孫とに示したのである。

参考図書 注解書 Hertzberg (Old Testament Library), Klein (Word), ブルッゲマン (現代聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

ルカ10・25〜37

タイトル

親切なサマリヤ人

暗唱聖句

この三人の中でだが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。

ルカ10・36

目標

助けを必要とする人々の良き隣人となる。

導入

(今田雅子)

K君は、学校に行って1時間目の授業の用意をしている時、大変！ 筆箱がない、昨日宿題をして机の上に置きっぱなし、鞆かばんに入れるのを忘れた。ガーンでしょう！ と思っていると、この前転校してきた隣の席のM君が「これ、貸してあげる。」と鉛筆や消しゴム等を貸してくれました。M君って、ツンツンしてるように見えるし、クラスの何人かは悪口言ってる、嫌な奴だなーって思ってたけど、なかなかいい奴だなって思いなおしました。

隣人ってだれのこと？

ある律法の専門家が立ち上がって、イエス様なら何て答えるだろう、試してやれ。という思いで、「先生。何をしたら、永遠のいのちを自分のものにできますか。」と質

問しました。イエス様は「聖書に何と書いてありますか。あなたは、どう読んでいますか。」と言われました。すると彼は「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」と答えました。イエス様は「あなたの答えは正しい。百点満点です。それを行いなさい。そうすれば、いのちを自分のものにできます。」と言われました。すると、律法の専門家は心で、「そんなことわかってる。言われなくっても。」と読んでいたので、「私の隣人とはだれですか。」と尋ねたのです。実は、彼の考えていた隣人って、自分の家族や仲間、友達のことだけ、それ以外の人は、隣人とは考えていなかったのです。

親切なサマリヤ人の話

イエス様は、彼の心を見抜いてたとえ話をされました。

ある人が、エルサレムからエリコに行く途中、シーンとした寂しい岩だらけの山道を早足で歩いていました。「ここは強盗がよく出ること有名な所だ、暗くなる前に早くいかなないと！」そんなことを考えながら歩いていると突然岩の蔭から男たちが飛び出してきて、「おい、金を出

7月

10日 礼拝メッセージ例

せ！」と叫んで、旅人を殴ったり、蹴飛ばしたりと、ボコボコにして、服や持ち物を全部奪って行きました。旅人は「たつ、助け……もうだめだ！」ドタツと倒れ、ピクリとも動けません。死んだように倒れているところに、神様の為に働く祭司が通りかかりました。「あつ、だれか倒れている。そうか、強盗にやられたんだ！ 早く行かないと私もやられる！」倒れている旅人を見ないふりして道の反対側をさっさと行っていました。次にレビ人がやってきました。この人も神様の働きをしている人です。「うわあ、強盗にやられたんだな！」この人も、旅人に声もかけないで道の反対側を走って逃げて行きました。旅人は体中が痛み、心も折れてしまい、「ここでもう死んでしまうのか……」と助かる望みなく横たわっていました。その時です。カッポカッポというロバの足音が聞こえてきたのです。その音が近づいて来たかと思うと、「うわあ、これはひどい！ かわいそうに。」と傷を消毒し、オリーブ油を塗って包帯し、自分のロバに旅人を乗せて宿屋まで運びました。旅人を助けたサマリア人は、一晩中看病し、次の日の朝早く、宿屋の主人にお金を渡し「この人の世話をしてください。もっとお金がかかったら、

私が帰る時に払います。」と言って出かけて行きました。

隣人になる

イエス様は、話し終わると、「この三人の中でだが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」と尋ねられました。律法の専門家は「助けてあげた人です。」と答えました。「そうです。あなたも行つて同じようにしなさい。」と言われました。イエス様の時代、ユダヤ人とサマリア人は、すごく仲が悪かったのです。けれど、助けたのはサマリア人だったのです。あなたの隣人とは、あなたの助けがいる人のことなのです。

皆さんは、誰か困っている人がいたら助けたいと思いませんか？ いえ、助けているでしょう。でも、仲の悪い人や嫌いな人だったらどうかな？ そういう人を助けて良い隣人になるつて、すごく難しいよね。でも、イエス様を信じるとき、イエス様に喜んでもらいたいと思うときに、私たちの心の中は神さまの愛で一杯になって、隣人を愛する心、その人を思う優しい心が与えられるのです。「良い隣人になれるかなあ……」と思っている人も、神様に祈れば、誰かを助ける良い隣人になれるのです。

♪愛をください♪ (イン67、ホ78)

聖書 ルカ10・25〜37 テーマ 親切的なサマリヤ人

序論

(福井文彦)

この箇所はルカだけが記している有名な「よいサマリヤ人のたとえ」です。ある律法の専門家が「イエスを試みよう」として〈何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか〉と質問しました。そこでイエスは、「律法には、永遠のいのちとは神への愛と隣人愛りんじんあいであると記されている。あなたは、助けを必要としている人の隣人となりひととなりなさい」と教えられたのです。

一、律法の教え

律法の専門家とは律法の教師とも呼ばれましたが、パリスイ人の中にもサドカイ人の中にもいました。彼らの大部分の者は、宗教の外面的な形式に注意を払う偽善者であり、心の中にはいささかのへりくだりの思いもなく、神を知りたいという願いも全くありませんでした。彼らは、格別に貧しい人々に重荷を負わせ、助けようなどとは少しも考えませんでした(ルカ11・45〜52)。

イエスは、ある律法の専門家の〈何をしたら、永遠の

いのちを受け継ぐことができるでしょうか〉との質問に対して、〈律法には何と書いてありますか。あなたはどう読んでいますか〉と質問されました。彼の答えは正しく、旧約聖書の教えを知っていましたし、神を愛し隣人を愛することであることは彼には明らかでした。

そこでイエスは〈それを実行しなさい〉と律法の専門家にお迫りになりました。彼は自分がこれらの律法を破り、自分の隣人愛について、愛の不足を感じていたのです。しかし、彼は悔い改めず、律法の前に正しい者であることを立証しようとしました。それで、彼は、〈自分が正しいことを示そうとして、イエスに〈では、私の隣人とはだれですか〉と逆に問い返したのです。

二、よいサマリヤ人

このような律法の専門家の逃げ口上に対して語られたのが、よいサマリヤ人のたとえです。

エルサレムからエリコへ向かっていたユダヤ人が強盗に襲われ、半殺しにされ倒れていました。そこを祭司が通りましたが、倒れている人の向こう側を通って行きませんでした。彼は律法にあるように、死体によって汚れることを避けたのでしょう。しかし、エルサレムの神殿での奉

仕を終えて帰る途中ですからその心配はなかったはずで
す。次にレビ人が通りました。彼は倒れているユダヤ人
に気づいたのですが、祭司同様に見て見ぬふりをして、
向こう側を通って行きました。

彼らは半殺しにされ倒れている人を助けることより
も、律法によって求められている儀式的なきよめを守ろ
うとして、律法が真に意図する愛に生きようとしません
でした。

ところが、強盗に襲われ半殺しにされたユダヤ人に本
当に親切にしたのはサマリア人でした。ユダヤ人とサマ
リア人とは敵対関係にありました。それにも関わらず、
サマリア人は〈見てかわいそうに思いました。それで
この危険な場所で立ち止まって十分な介護をし、自分の
家畜に乗せ、宿屋に連れて行き、そこで介抱したのです。
その上、宿料二デナリを払い、それ以上の必要経費があ
れば、それも支払う約束をして旅立ったのです。

三、隣人

イエスはよいサマリア人のたとえを話し終えられる
と、律法の専門家にお尋ねになりました。〈この三人の
中でだが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いま

すか〉と。彼は〈その人にあわれみ深い行いをした人で
す〉と答えました。そこで、イエスは〈あなたも行つて、
同じようにしなさい〉と、愛の実践を命じられたのです。

ある人は隣人とは助けを必要としているユダヤ人のこ
とであると考えられるかもしれません。しかし、イエスはそ
のような意味でたとえをお話しになったものではありません。
よいサマリア人が隣人なのです。これが律法の専門
家に対する答えです。

律法の専門家は、他の人を愛する時、愛する価値のあ
る隣人はどこまでの人か、その愛する義務と限度を教え
てほしいと求めたのです。それに対してイエスは「愛の
対象には限度がなく、敵であつても隣人となつて愛する
ことである。あなたが愛の心を持ち、あなたが助けるこ
とができるすべての人々の所へ出かけて行く隣人になれ
るかどうかが問題なのである」と教えられたのです。

結論

私たちクリスチャンは、聖霊によつて愛に満たされ隣
人となるべきです。そして、助けを必要としている人で
あればだれにでも近づき、助けることができる者となり
ましょう。

研究資料

(小平徳行)

このたとえ話から、私たちが愛することによって隣人になることを学ぶ。

テキスト

25 イエスを試みようとして 教えてもらうためではなく、どのように答えるかを見てイエスの知恵を試すため。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょう。か 永遠のいのちを受け継ぐことは、当時のラビたちにとって一般的な神学的問いであった。「何をしたら」と問うているところから、律法学者は、行ないによる救いを考えており、神の恵みを理解していなかったことを示している。

27 律法学者は申命記6・5とレビ19・18を引用して答えた。イエスも一番重要な律法は何かと質問された時、同様に答えていることから(マルコ12・29～31)、この律法学者は律法に対して深い洞察をもっていた。

29 自分が正しいことを示そうとして この律法学者は確かに律法に通じていたが、実行する事に欠けていた。そのため、自分を弁護しようとした。隣人 ラビたちに

とつてはユダヤ人同胞を意味した。レビ19・18では、明らかにこの意味で用いられているが、同34節では、その地にいる他国人にも当てはめられている。

30 ある人 ユダヤ人であると考えてよい。エルサレムからエリコへ下って この区間は約28キロメートルあり、標高差約千メートルを下る道で、ひっそりとした砂漠や岩地を通る。この道の強盗は有名で、特に一人で旅をする者を襲った。途中にマアレー・アドラーム(赤い坂)と呼ばれる場所があり、伝説ではそのあたりに強盗が出没して多くの血が流されたため、土地が赤くなったので、そう呼ばれているという。

31 祭司が一人…彼を見ると反対側を通り過ぎて行った 祭司は倒れている人の反対側を通った。彼は律法にあるように、死体によって汚れることを避けるためと思われる(レビ21・1)。しかし祭司は「下って来た」とあるように、エルサレム神殿での奉仕を終えて帰る途中であった。したがって実際は宮での務めを果たせなくなるという心配をする必要がなかった。もし明らかに生きていると判断できれば隣みを優先させるが、ほとんど死んでいるように見えたので、祭司は危険を冒そうとはしなかつ

た。

32 レビ人 祭司同様に汚されることを避けようとした。祭司とともにレビ人は、ユダヤ教の聖職者として率先して律法を実行すべき人として登場している。それゆえにこの両者の姿は、律法によって求められている儀式的なきよさを守ろうとして、律法が真に意図する愛をないがしろにする律法主義の真相を明らかにしている。

33 サマリア人 祭司やレビ人、律法学者が軽蔑し、差別した民でユダヤ人は彼らとの接触を避けた。ユダヤ人とサマリア人の間にある敵意の歴史から見て、ユダヤ人を助けることが最も期待できないのがサマリア人であった。しかし襲われたユダヤ人を助けたのは、このサマリア人であった。**かわいそうに思った** (ギスプランクニゾマイ) この言葉は「はらわた」から来ており「はらわたを突き動かされる」という意味である。サマリア人の行動のすべては、この思いのなせるわざであった。この言葉は、放蕩息子の父親(7月31日分)の「かわいそうに思い」(ルカ15・20)や、キリストがあわれみを示される時に使われている(マタイ9・36、14・14、15・32、20・34など)。したがって、このサマリア人の中にキリス

トを読み取ることもできる。

34 35 オリーブ油とぶどう酒 オリーブ油は傷を洗うため、ぶどう酒は傷口の消毒のためであり、両方を混ぜて軟膏として用いられた。**自分の家畜に乘せて** つまりサマリア人自身は歩かなければならなかった。**宿屋に連れて行って介抱した** このサマリア人は、襲われた人を宿屋に連れて行く事で自分の義務を果たしたとは考えず、続いて彼の世話をした。**デナリ二枚** 二日分の労賃だが、当時の食費から推計すると宿賃としては高額であった。さらに不足分の支払いまで約束した。彼は自分のできるすべてをしたのである。

36 だれが隣人になったと思いますか 隣人を愛するとは、愛する価値のある「隣人はだれか」と愛の対象を制限することではなく、たとい敵であっても「隣人になって」愛することであると教えている。そのためにはキリストの愛に満たされることが必要である。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・The IVP Bible Background Commentary: NT, Leon Morris, Luke (The Tyndale New Testament Commentaries).

聖書

ルカ12・13～21

タイトル
暗唱聖句

おろかな金持ちのたとえ話
 人があり余るほど持っていて、その人のいのちは財産にあるのではないからです。

ルカ12・15

目標

地上の富ではなく、神に喜ばれる生き方を選び取る。

導入

(和田牧子)

皆さんは大きくなったら、どんな仕事をしたいですか？ スポーツ選手、看護師さんやコンピューターの仕事：いろいろありますね。時には「どんな仕事でもいいから、とにかくお金持ちになりたい！」という人もいるかもしれませんね。お金はとっても大切。でも今日のイエス様のお話ではお金よりもっと大切なことがあると教えられますよ。

貪欲に気をつけよう！

イエス様は多くの人たちにたとえ話をつかって、わかりやすく神様のメッセージを語られました。そのお話は評判が評判を呼び、「いたたた」と足を踏みあうほど、さ

らに多くの人たちが集まりました。ある日、そんな人たちの一人が言いました。「先生、遺産をちゃんと私と分けてくれるように、私の兄弟に言ってください！」遺産って聞いたことありますか？ 親や親せきが、亡くなった後に残したお金や持ち物のことです。この人は、兄弟が自分に遺産を分けてくれない：と不満や怒りでいっぱいになっていたようです。そんなお願いに対してイエス様はこう答えられました。「どんな貪欲にも気をつけ、注意しなさい。」貪欲とは「あれも欲しい、これも欲しい、もっと欲しい！」とお金や物で心がいっぱいになってしまふことです。それからイエス様は「人があり余るほど持っていて、その人のいのちは財産にあるのではないからです」と言われました。どういう意味でしょう。

あるお金持ちのたとえ話

イエス様は「ある金持ち」のたとえ話を始められました。そのお金持ちは広い畑を持っていたのでした。ふつうなくさんの作物が実って、あり余るほどでした。ふつうなら「良かった、神様感謝します！」となるところでしうが、この金持ちは何やら心配しています。「どうしよう。わたしの作物をしまっておく場所がない」。うーん、

7月

17日 礼拝メッセージ例

困った、困った……というわけです。そして「名案だ！」とばかりに言いました。「こうしよう。わたしの倉をこわして、もっと大きいのを建て、わたしの穀物や財産はすべてそこにしまっておこう！」

何だか貪欲とはこういう人のことを言うのかなと思いませんか？ 「わたしの作物」「わたしの倉」「わたしの穀物」：「わたし」「わたし」って、すべては「わたし」中心に考えているようですね。この金持ちは続いて言いました。「自分のたましいにこう言おう。『わたしのたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ！』この人は自分の持ち物を自分のためだけにしつかりためこみ、「あとは残りの人生楽しむだけだ！」と考えたのでした。

このたとえ話の終わりにイエス様はこう語られました。「しかし、神は彼に言われました。『おろか者！ おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られます。』自分のためにたくわえても、神に対して富まない人はこのとおりです！」ガーン。お金や財産を持っけていても、人は自分がいつ死ぬかさえも決められないのですね。

神様に目を向けよう！

わたしたちのいのちも持ち物も、すべて神様からいただいたプレゼントです。神様はわたしたちが生きていけるだけの必要なものを十分に与えてくださる方です。お金や財産や自分の健康や才能に頼っていても、ほんとうの意味で頼りにはなりません。大切なのは、いのちを与えることも取り上げることもできる神様に目をむけることです。

目に見えるこの世界の何かに頼っているなら、簡単に心は不安になるでしょう。何よりも、いつこの人生が終わるかわからないと思うと、何だか心配で、死ぬこともこわいですよね。でも神様は私たちが永遠に神さまとともに生きることができるように、イエス様を十字架にまっでかけ、よみがえらせてくださった方です。身体の死はつらいかもしれませんが、それで終わりではありません。神様にしつかりと目を向け、神様とともに生きるときに、わたしたちの人生は自分だけのためにあるのではないとわかってきます。神様を愛し、家族やお友だちを愛して、神様の愛をシェアする（プレゼントする）喜び、楽しさを体験できるようになりますよ！

♪小さいわたしの♪（ホ14、ふ68）

聖書 ルカ12・13～21 テーマ 愚かな金持ちの譬え

序論

(宮澤清志)

イエスは偽善を戒め、日常生活のことで心配するのではなく、神の国を求めることが大切だと説いておられました。その最中に、財産問題の調停話を頼みに来た人があったのです。この人にとって財産問題は、神の国について教えるラビにこそ解決されるべき、重要課題に思っていたのです。

お金こそ最も大切なことなのでしょうか？ お金で幸せが買えるのでしょうか？

一、財産が魂を養う？

イエスは、ここでも譬えで教えられました。命と魂の安全が、財産で保障されると誤解している金持ちの話です。

実は、備えをすることは、聖書的なことです。創世記に記されたヨセフの話は有名です。ヨセフは七年間の豊作の内に、七年間の飢饉の蓄えをしたのです。また、「子

が親のために蓄える必要はなく、親が子のために蓄えるべきです。」(Ⅱコリント12・14) というみ言葉もあるように、将来のための蓄えは、大切なことです。

ただ、「もし主の御心ならば」という姿勢が必要です。『今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしよう』と言っている者たち、よく聞きなさい。あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたはむしろ、『主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう』と言うべきです。』(ヤコブ4・13～15)とある通りです。確かにお金は大切なものです。必要なお金が不足していることは大変なことです。ただ、十分な財産があれば、魂に本当の平安が満たされるわけではありません。

二、魂は誰のもの？

この金持ちが、蓄えたこと自身が問題だったのではなく、その姿勢に問題があったのです。この金持ちの何が間違っていたのでしょうか。何故愚かだったのでしょうか。

この金持ちは大豊作を得た時、神の御手を見るのではなく、自分のことだけを見ました。日本語の聖書では充

分には訳出されていませんが、「わたしの作物…、わたしの倉…、わたしの穀物…、わたしの食糧…」と、ここでは「わたし」が非常に強調されています。この金持ちの自意識の強さが表されているのです。彼の興味は自分のことだけでした。

では、彼の魂は彼のものだったのでしょうか。彼が充分な蓄えをしたことで、彼の魂は安逸を約束されたのでしょうか。答えは、いいえです。人の魂を支配しているのは、いったい誰なのでしょう。神様だけが人の魂を支配し、人の命を決めておられます。その神様が、富を得た人間に何を求めているのかを見ることが大切なのです。

三、神に対して富む

イエスの時代のユダヤ人もそう考えていたように、物質的な祝福も、神様が与えてくださったものです。富そのものは、善でも悪でもありません。ただ、富を得たときに神のことを考えるか、自分自身のことを考えるかで、益になるか害になるかが分かれるのです。〈神に対して富〉むことが必要です。

この金持ちが、自分の為だけに財を蓄えることを考えたのが、神の前には貧しいことだったのです。そうではなく、神のために用いること、清い使い道を考えれば良かったのです。ジョン・ウェスレーは「多く稼げ、しっかりと蓄えよ、大胆に献げよ」と言ったそうです。それこそが、私たち神の前に生きる者の、富に対する考え方です。

新約聖書には、「天に宝を」という表現が繰り返されています（マタイ6・20、19・21、ルカ12・33、18・22）。自分のために蓄えるのではなく、人のためにきよく使うことこそが、すなわち天に宝を貯えることになるのです。

結論

この譬えを読み解く鍵は〈あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持つていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである〉です。イエスは、貪欲に注意するよう教えられたのです。その人の命が財産によらないだけではありません。宝のあるところにその人の心もあるからです（34）。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

13 先生 原語では呼格が用いられており、主に對する呼びかけの言葉であることが分かる。これは、ユダヤ教で一般に行われていた「ラビ」という律法学者への呼びかけに対応する。この群衆のひとり、イエスをラビのひとりとして理解し、そのイエスに自分の家族の遺産問題の調停人としての役割を期待したのであろう。当時のユダヤ教のラビは、その地域社会の家庭民事の調停者の役を兼ねていた。

14 伝統的なラビの役割としては、このようなリクエストに対して直接答えるのを常としていたようである。しかし、イエスはこれまでのようなラビの役割を超えて自身の究極的関心を開陳する。

15 ここから人々に対する警告が始まる。

貪欲 通常の金銭欲よりも包括的であり、なおかつ強烈な言葉である。たとえばコロサイ3・5では、この語は偶像礼拝と同一視されており、神の代わりに物を拝む事と同一視されている。あるいはⅡペテロ2・3において

は、自分の地位を利用し、仕えるべき人から逆にむさばり、同胞を、利益を得る相手と見なして、仕えるべき神の子と考えない罪とされている。この個所では、人生の価値は所有する物の数にあると考える人が持つ罪であり、物を得ることだけを欲し、与えることを決して考えない人の持つ罪であると考えられる。

16→20 ここから、いわゆる「愚かな金持ち」のたとえ話が始まる。ハンターは、通常このたとえ話は貪欲に対する「恐るべき警告」として理解されてきたと前置きし、その上で、この譬は「時」の譬であつたという方が更にふさわしいと述べる。神の国に生きる民は、終末に對する危機意識を持つべきなのである。

では、このたとえ話の中のいくつかの特徴的な言葉を取り上げてみたい。

どうしよう 金持ちの困惑の言葉。同時にこの男の自問の言葉でもある。このつぶやきは、人間の思惑を描写する、ルカ的表現の一つである。この思い巡らし自体は否定されてはいないし、人間にとって自然のことであらう。

作物 倉 穀物 財産 新改訳2017は、これらの言葉の前に、「わたしの(ギムー)」という言葉を読んで挿

入した（実は、新改訳第二版や口語訳には、部分的にか訳出されていない）。私の作物、私の蔵、私の穀物、わたしの食糧……。ここには、人間のもつ利己主義の醜さが如実に表れている。神が人に与えられた隣人はもとより、これら収穫物を与えられた神ご自身をも視野にいない人間の愚かな様を描き出している。神にかわって富、物質がこの農夫の崇拜の対象となっているのである。**愚か者** 実際生活の中で神を無視している人たちのことであり、神を忘れた者たちのことである（ヨブ2・10、詩篇14・1）。

今夜 前節の農夫の言葉「何年分も」に対応する言葉。神がこの農夫に対して「愚か者」（20）と叱責した真の意味はこの言葉の対比の中にある。食物をたくわえることにおいて、「たましい」のために「何年分も」備えができたとする考え方を、神は叱責されたのである。生命の安全を財産で保障できると思いきんでいるすべての人は、現実を避けて生きているのであり、自分の行動によって自分自身を愚か者と証明しているのである。同時にすべての聴衆に対して、現に起こりつつあることに目をさますようにという、イエスの劇的な警告とも解することが

できよう。

21 これまでの要約の個所であると同時に22節以降へのつなぎの言葉でもある。「あなたがたの宝のあるところ、そこにあなたがたの心もあるのです。」（12・34）と、この個所の結末部分にあるように、**神に対して富（む）**とは、わたしたちの心も含めて、一切を神に明け渡し神の所有に帰することである。人の「生命」も「財産」も「持ち物」も、万物の所有権を神に帰するときに、信仰者は「神の前に富む」自由を得る。それは同時に「自分のために宝を積む」生き方、「心配」（22）から解放され、財の正しい用い方を知り、地上のすべての所有者が神であること、私たちの「生」もが神からの一時的所有であることを悟ることができるのである。

参考図書 A・M・ハンター「イエスの譬えの意味」（新教出版社）、A・T・Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

聖書

ルカ15・1〜7

タイトル
暗唱聖句迷子になっていませんか？
いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩
かないでしょうか。 ルカ15・4

目 標

一人を追いつめて救おうとなさる神のみ
心を知って生きる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、迷子になったことがありますか。その時、どんな気持ちでしたか。迷子になって楽しい人はいないでしょう。淋しくて、不安で泣きそうになりませんでしたか。でも、お父さんやお母さんが捜してくれて会うことができた時には、安心して、嬉しかったでしょう。

イエス様は、お父さんやお母さん以上に、皆さんを真剣に捜しておられます。

イエス様は私たちの羊飼いです

イエス様の所に、罪人と言われている取税人たちが話を聞くために近寄って来ました。でも、それを見ていたパリサイ人や律法学者たちは「イエスは、罪人たちと一緒に食事をしている。何ということだ」と文句を言い

出したのです。それを聞いたイエス様はパリサイ人らに、羊飼いの話をされました。それは「大切な羊を百匹持っていてその内の一匹が迷子になったら見つけ出すまで捜すでしょう。そして、見つかったなら近所の人たちを呼んで一緒に喜ぶでしょう。そのように悔い改めて罪から自由にされた人がいたなら、天では大きな喜びがある」と言うものでした。ここでイエス様の言われた迷子になった羊とは、私たちのことです。羊は迷いやすく弱い動物で一匹では生きて行けません。私たち人間も同じです。

そして、この羊飼いは神であるイエス様です。私たちが、イエス様を知らないか信じていないなら、私たちは迷子になっています。皆さんはどうですか。もしも羊が羊飼いに捜し出されないでいたら死んでしまいます。イエス様を信じている人にはイエス様が私たちの羊飼いとなってくださいます。そして、いろいろな危険から守り、私たちが幸せな生活へと導いてくださるのです。イエス様はあなたの羊飼いですか？

イエス様は私たちを愛される

皆さんは、大切な物を必死で捜し出したことがあるでしょ

う。この羊飼いは、「見つかったも見つからなくてもいいや、あと九十九匹もいるんだから」と思ったでしょう。そうではありません。羊飼いは九十九匹の羊を後にして、迷子になった一匹のために捜しまわりました。それも簡単にあきらめたりはしません。見つけるまで必死に捜したのです。そのようにイエス様は、迷子になっている私たちを捜されます。それは、イエス様が心の底から私たちを愛しておられるからです。愛の大きさはその人に使う時間と力によって知ることができます。

イエス様は、皆さんがイエス様のもとに帰ってくるまで捜し続けます。あなたがこんなにもイエス様に愛されていることを思い巡らしてみましよう。

イエス様は私たちを喜ばれる

羊飼いは迷子の羊を捜し出して、その羊をがっしりと抱えて肩に乗せました。迷子の羊に「怖かっただろう。大丈夫だからな。もう決してお前を放さないぞ」と言う思いがあったのでしょうか。羊飼いは、羊が見つかった喜びを友人や近所の人たちと共に分かち合いました。羊飼いがどんなに羊を愛していたか、また見つかったことをどんなに喜んだかが分かります。

皆さんも、無くした大切な物が見つかった時には嬉しかったでしょう。イエス様も私たちを捜し見つけ出した時には大いに喜んでくださいます。イエス様にとつて私たちは失いたくない喜びの存在、愛おしく大切な存在なのです。

まとめ

今、皆さんはイエス様から離れて迷子になっていませんか。「イエス様なんて信じない。僕には関係ない」と思っている人は、迷子になっています。そんな人をイエス様はどんなに悲しんでおられるでしょうか。イエス様は皆さんを今も、見つけ出すまで捜しておられます。羊飼いは羊に心を留めます。また、羊は羊飼いのものにいるからこそ、安全に生活できます。私たちもイエス様から心を留められ、イエス様のもとにいてこそ安心して暮らすこと出来るのです。私たちを愛し喜んでくださるイエス様のもとに帰りましょう。

♪子どもの友は（こどもをまねく）♪

（ホ7、ふ45、こ48、こ改5他）

聖書 ルカ15・1〜7 テーマ 迷子の羊

序論

(宮澤清志)

〈九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を〉捜す羊飼いのたとえは有名です。絵画や黒人霊歌の題材にもなっています。ただ、われわれ日本人には非現実的な話に聞こえたりします。九十九匹はどうなってしまふのだろうと考えるからでしょう。実は、野原には雇われ牧者が番をしているはずであったことが省略されているのです。「死んでしまふかもしれない迷子の羊は、人任せにするわけにはいかない」という良い羊飼いがいるということとえです。

一、罪人を捜し出す主

人々がさげすみ、関わりを持つとしなかった〈取税人たちや罪人たち〉と、イエスは積極的に関わりを持ちました。〈パリサイ人たち、律法学者たち〉は、教師であるはずのイエスが、汚れた者たちと関わるのが不満で、つぶやいていました(2)。

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。」(マタイ9・12、マルコ2・17)とイエスが語られたのも同じような場面でした。

つぶやいている自称義人の人々に対して、ここでイエスは、たとえを通して自分が何者であるのか、神様は何を求めておられるのかを示されました。三つのたとえで語られた15章全体に繰り返される鍵の言葉があります。「いなくなった」、「なくした」(4、6、8、9、17「死ぬ」、24、32)、「見つける」(4、5、6、8、9、24、32)、「喜ぶ」、「喜び」(5、6、7、9、10、32)、「悔い改め」(7、10)です。つまり、イエスは失われた罪人を捜し出して、救いに導き入れることを使命としておられたのです。そして、神様は罪人が救われることを最も喜んで下さるのです。

二、羊飼いである主

失われた羊と羊飼いが何をたとえているかは、聞いている人々にはすぐにわかつたはずで、旧約聖書では、羊飼いと羊は神と民の比喩ゆづりでした(詩篇23・1)。また、イエスは自分を良い羊飼いにたとえられました(ヨハネ10・11)。

良い羊飼であるイエスは、残りの羊を人任せにしても失われた羊を捜します。羊を愛する故に、自分が手間をかけることを惜しみません。また、迷子の羊がさまようであろう危険な場所を、自らの命の危険も顧みずに捜し歩きます。

そのように、イエスは地上の生涯を全うし、十字架の身代わりを完成されました。

三、悔い改めを求める主

たとえのまともに、イエスは〈悔い改め〉という言葉を繰り返されました。羊が羊飼いの元に帰るように、神を離れた罪人が神の元に帰ることが悔い改めです。

罪人が救いに入るためには、この悔い改めがどうしても必要です。後のたとえに出てくる放蕩した弟息子^{ほうとう}は、「我に返って」(17)、心からの悔い改めを告白しました(21)。

では、たとえを聞いていたパリサイ人や律法学者たちは悔い改める必要のない人々だったのでしょうか。〈悔い改める必要のない九十九人の正しい人〉と言われたイエスの言葉は、パリサイ人たちに対する皮肉だけなのでしょうか。後の二人の息子のたとえが、兄息子の反応待

ちのように終わっていることからしても、イエスは自称義人の彼らが「我に返る」ことを望んでおられたのではないのでしょうか。イエスはパリサイ人たちにも呼びかけておられたのです。

悔い改める必要のない正しい人間などありません。人は皆生まれながらの罪人です。外側の行いをどんなに整えても、心の中の妬みやつぶやきも罪です(マタイ5:21-48)。悔い改めて神様の赦しと救いをいただくことが必要です。

結論

私たちは、ある意味で迷子の羊のようです。神様の元から自分勝手に離れてしまい、命を失う危険にさらされています。

また、私たちはある意味でパリサイ人たちのようです。神様のことを知り神様に愛されたいと願いながら、神様が本当に望んでおられる生き方ができないでいます。

私たちは皆、自分の何が間違っていたかを悔い改めて、神様の元へ立ちかえらなければなりません。神様は何よりもそれを望み、待っていてくださいます。

研究資料

(宮澤清志)

この個所は、ルカによる福音書の中でも重要な譬が並べられている個所といえる。特に本章では3つの譬が並べられており、そのどれもが「なくしたものを見つけた喜び」というテーマにおいて語られている。ルカではこのように一対の短いたとえ話を語り、その後、クライマックス的なたとえ話を語るといふ手法が取られることがしばしばある。それゆえ今回の聖書個所を語る際には、これに続く2つのたとえ（15・32）まで目に通しておく必要がある。

さて、この「失われた羊」のたとえはマタイ18・12～14にも登場している。ハンターは、この失われた羊のたとえは、マタイとルカとではその聴衆を変えていると指摘する。ルカでは（おそらくこちらの方が原型に近い）、パリサイ人たちに語られた神の救いの喜びのたとえであったのに対して、マタイではあやまちを犯す教会員に対する配慮を求める弟子たちへの勧めのたとえとして語られているのである。

テキスト

1～2 15章全体にかかる、このたとえ話の導入。ルカにおいてはよくあることではあるが、この導入によって、本題であるたとえをどのように理解すべきかを示しているのである。近くにやって来た 取税人や罪人たちを主語とした言葉。しかし、主はその取税人や罪人たちを「受け入れている」(RSV)のであり、「歓迎している」(NEB)のである。むしろ主のこの行動に注目したい。次節には 受け入れて という言葉が登場するが、イエスの側からすれば、取税人や罪人がイエスのもとに来ることを歓迎したのである。喜んで迎え入れたのである。しかも、一緒に食事をしている この光景は、5・29～32にも登場しているので、そこをも参照していただきたい。

一方、その光景を見て、パリサイ人や律法学者たちは文句を言った(ギ)ディアゴンギュー)。この言葉は、通常の「つぶやく」よりも強調されて用いられている。この語は他にはルカ19・7にのみ用いられている言葉である。罪人 道德的な法を破った人というだけにとどまらず、パリサイ人や律法学者たちが実践した儀式的洗浄規定を守らない、守れない人々をも含んだ言葉であろう。

あるいは律法を知らない人々に対してもこの言葉が用いられた。

4～6 羊の譬は旧約聖書においてはしばしば登場するが、そこでは選民であるイスラエルの民が羊にたとえられている（エゼキエル34・11～12、イザヤ40・11、他）。そして、これらの個所では、羊飼である神が失われた羊を探し出し、取り戻す存在として描かれている。更に、新約聖書ではイエスご自身が「わたしはよい羊飼です」（ヨハネ10・11）と語られる。同時にこの羊飼は、一匹の羊の名をも覚えていいるのである。

4 野（ギ）エレモス） この言葉は、他の聖書の訳では「荒野」（マタイ3・1、マルコ1・3）という意味で用いられている。**九十九匹** 残された九十九匹の羊はどのようなのか、という問いは、ここでは愚問である。それよりもこれら九十九匹を野に残しても失われた一匹を探しに行くという羊飼いの愛を語りたい。羊飼いにしても、いなくなった一匹を探しに出かけるといふことは、自らの命をかけた行為である。捜し歩かないでしようか ここには「当然捜し歩くはずである」という含みをもって語られている。

5 マタイの並行記事にはない言葉。さまよい歩いて疲れ果て、長い道のりを歩いて帰れなくなっていたのであらう。

6 一緒に喜んでください 見つけた本人だけが喜ぶのではなく、罪人たちやパリサイ人、取税人たちへの招きも含まれる。それほど喜びの大きさを示している。それは、ただの喜びではなく、祝宴を伴った喜びであり、失われた者が悔い改めて神に立ち返るなら、天上では御使いの大祝宴が催されているのである（7、24）。

7 この節は、この譬の意味についてイエスご自身が聴衆に与えた解説である（10節も同様。なお、19・10も同時に思い巡らしていただきたい）。**悔い改め**（ギ）メタノエオー）（善に向けてであれ悪に向けてであれ）心を変更することを指す言葉である。**悔改める必要のない九十九人の正しい人** 外側は律法に忠実でいる大半の人々のことである（ゴデー）。具体的には、自らを正しいとし、自称義人をきめこむパリサイ人たちに對する皮肉の込められた言葉であらう。

参考図書 7月17日分と同じ。

聖書

ルカ15・11～24

タイトル

放蕩息子

暗唱聖句

この息子は、死んでいたのに生き返り、
いなくなっていたのに見つかったのだから。

ルカ15・24

目標

神のもとにこそ本当の幸いがあることを
知り、神に立ち返る。

導入

(今田雅子)

M君は学校から帰って来て、昨日の続きのゲームを始めました。夢中になっていた時「宿題ないの？ 勉強しなさい。」とお母さんに言われました。ゲームを続けていると、今度はお父さんに「宿題しなかったら、夕食は無いぞ！」と言われました。「せっかくなのだから、二人ともうるさいなあ。」と思いました。皆も、ずーっとゲームできたら、毎日友達と遊んで、好きな物だけ食べれたらいいのに」って、思ったことはありませんか？

お父さんのところから離れた息子

今日は、お父さんのところから離れた放蕩息子のお話。ある所に、お父さんと二人の息子が住んでいました。

お金持ちの家で、畑や牛や羊の世話をする雇い人が沢山いました。息子たちも家の仕事を手伝いながら毎日生活していました。ある時、弟息子は、「あー、嫌だな、ずっとお父さんの言うこと聞かないと駄目なのか！ 超、窮屈。何か面白いことないかな、町に行ったら楽しいかも。一人で自由に生活したい。そうだ、お父さんに、財産の分け前をもらおう。お金があつたら自由に生活できるぞ！」彼が、「お父さん、僕の財産の分け前を下さい。」と言うと、お父さんは、財産を分けてやりました。弟息子は財産を全部お金にし、遠い町へ行ってしまいました。お父さんは、悲しくて、寂しくて、心配だったでしょう。そんなお父さんの気持ちなんて解らない彼は、「やったー僕は自由になった！」町に着いた弟息子、見たこと無いものを食べ、毎日遊んでいました。仕事もしないで遊んでたので、一杯あつたお金も全部無くなってしまいました。すると、沢山いた友達も皆いなくなつて、一人ぼっちになってしまいました。しかも、その地方に飢饉が起こり、食べる物も無くなり、仕事を探してもありません。やっと見つけた仕事は、豚の世話をする仕事でした。

「あー、お腹空いて死にそうだ。豚の餌のいなご豆でもいいから食べたい!」と思っても、それももらえませんか。

ハツと気づいた息子

その時です。弟息子はハツと我に返りました。「そうだ! お父さんのところには食べ物一杯ある。でも、僕はここで飢えて死にかけている。」彼は、自分がどんな状態か、何をしてきたか。自分のことだけ考えて、他の人の思いを解^{わか}ろうとしなかった。そんな自分に気づいたのです。それは、父親のところに行った時のことを思い出したからなのです。「僕がバカだったんだ。お父さんのところに帰って謝ろう。『お父さん、ごめんなさい。もう、息子と呼んでもらうことなんか出来ません。雇い人にでもしてください』と。」

受け入れてもらった息子

ボロボロで惨めな姿の息子は、トボトボと家に向かって歩いて行きました。すると、家から遠く離れた所で息子を見つけた父親は、彼のところに走り寄って来てすぐにギュッと彼を抱きしめ、口づけしたのです。お父さんは、息子が出て行った時からずっと彼のことを忘れたことはありません。「今か、今か」と帰って来るのを待つ

ていたのです。息子は、「お父さん、私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者。息子と呼ばれる資格はありません。」と言いました。ところが父親は、息子に何も言わず、彼の為に服や指輪を与えます。そして、「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。」とお祝いのパーティーまでします。彼はどんな気持ちだったでしょうか。「自分勝手に、お父さんのところから離れた僕を、赦して受け入れてくれた。」そんなお父さんの愛を知って、嬉しくて涙が出たでしょう。そして、お父さんのところにずっといて、お父さんの為に何でもしたいと思ったことでしょう。

父なる神様は、このお父さんのような方です。私たちが、帰って来るのを今か今かと待っておられます。そのためにイエス様が十字架で命を投げ出して下さったのです。「イエス様は、私の罪を赦す為に十字架に架かって死んで下さいました。赦して下さい、信じます。」と悔い改めて、神様のところに帰りませんか? 神様から離れては、本当の幸せはありません。私達を、喜んで赦し受け入れ、愛して下さいる神様のところに、さあ帰りましょう。

♪気づかなかった♪(イン34)

聖書 ルカ15・11～24 テーマ 放蕩息子

序論

(福井文彦)

有名な「放蕩息子のたとえ」として知られている個所です。たとえの中心は放蕩息子のように思われますが、真の主役は父です。《死んでいた》のも同然の息子を迎え入れる父の姿を通して、この物語ほど天の父なる神の愛を豊かに表しているたとはありません。この話を通して、私たちの本当の幸せは神にあることを教えられます。

一、父を離れて

弟息子は、父の存命中に遺産相続を要求し、与えられた財産全部を早速お金に換えて、父を離れ遠い所へ旅立ちました。ところが、そこで放蕩の誘惑にとらえられ、全財産を使い果たしたのです。

弟息子がすべてを使い果たした時、その地方にひどいさきんがやってきました。彼はたちまち困窮して、ある人の所に世話になろうとしました。しかし、世間は甘くないもので、その人は彼に豚を飼わせたのです。イスラ

エルでは豚は汚れた動物ですから、豚飼いは奴隷の仕事でした。彼は屈辱的な仕事についたのですが、それでも食べることに窮してしまつたのです。彼は豚の食べるいなごまめを食べたいと思うほどでしたが「それをくれる人はいなかった」(16節直訳)のです。

何が問題だつたのでしょうか。誘惑に満ちた悪い環境、あてにならない表面的な人間関係、予期せぬ自然災害でしょうか。しかし一番の問題は彼が自由を求めて父から離れたことでした。この弟は父の心を知らず、父の気持ちに完全に無視しました。彼の関心は父のことより財産であり、人よりもまず自分のことであり、父との関係を煩わしく思い、父を離れたのでした。

二、父のもとへ

弟息子は食べ物にも窮し、豚飼いの仕事をしてやっと餓死を免れていました。しかし、空腹で汗と埃にまみれ、豚と一緒に暮らす惨めなどん底の生活でした。そんなある日、つくづくと我が身をかえりみ、彼は(我に返つて)、今まで気づかなかつた自己を見出したのです。このような状況に至つたのは環境や自然災害や人の関係ではなく、自由を求めて父のもとを離れた自分勝手な生き

方にあつたことに気づいたのです。

彼はふと思ひ起こしました。「父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている」と。とにかく家に帰って「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」とお願いしよう。

彼は自分の人生の悲惨さを認め、その原因である自分の罪を告白して（悔い改めて）父に帰ろうと決心したのです。本来ならば到底赦されないことであるが、父の情けによって雇い人の一人にでもしてもらおうと決心するのです（黙示録2・5）。

三、迎える父（神）

このたとえ話のクライマックスは、放蕩息子を迎える父の愛です。弟息子は、「立ち上がって、自分の父のもとへ向かった」のです。彼にして見れば、父から離れて遠い所へ行った時のことを思えば、どの面下げて帰ればよいのか、とても父に合わせる顔もなかったでしょう。

しかし、父は日々、首を長くして、息子の帰りを待つ

ていたのです。父は変わり果てた姿の息子を遠くから認め、走り寄り、首を抱いて口づけしました。それだけではありません。息子のさんげのことばを最後まで言わせず、一番良い衣を着せ（新しい品性）、指輪をはめ（子としてのしるし）、履き物をはかせました（新しい歩み）。

さらに、「肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べ祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから」と、盛大な祝宴が開かれました。

こうして、父から離れ豚と一緒に暮らす惨めなど底の生活をしていた放蕩息子は、父の愛で満ち足りたのです。

結論

神から離れた人生は放蕩息子のように幻滅に終わります。しかし、神のもとには真の幸があります。その神のもとに帰るために、すでに父の側で一切の備えが出来ます。それがイエス・キリストの十字架です（ヨハネ19・30）。ただ、私たちが悔い改めて、父の元に帰るなら無限の愛をもって迎え入れてくださり、だれでも満ち足りた本当の幸いな人生を送らせてくださるのです。

研究資料

(小平徳行)

15章全体は、3つのたとえ話から成っている。全体としてのテーマは「失われたものを取り戻す喜び」である。その中で、ここは罪人を赦す神の愛のたとえ話と言うこともできる。イエスはここで福音の全体を語ったのではなく、福音の主動力となる神の赦しの愛について語っている。また、先の2つの話では捜す神が、ここでは帰って来るのを待っている神が描かれていることから、人間が神のもとに帰ることの必要を教えている。

テキスト

12 私がいதாக分 遺産の分配は長子が他の兄弟の二倍となる。したがってこの場合、弟息子は父の遺産の三分の一(申命記21・17)である。遺産の分配を父の存命中に求めることは当時法外なことで、「父よ、わたしはあなたがすでに死んでいればよかった」と言うことに等しかった。父の生存中に分けた場合、長子の分は父の死まで父の手中にあり続ける。

13 すべてのものをまとめて 新共同訳では「全部を金

に換えて」。彼が何も残さずに出て行ったということは、やがて帰ってくる可能性は一切考えておらず、父親を顧みる気持ちも一切ないということである。遠い国そこでは豚が飼われていることから、異邦人の世界へ行ったということである。放蕩(ギ)アソートス) 語源的には「救いのない、維持することができない」という意味を持っている。

15 豚の世話をさせた 律法によれば豚は汚れた動物とされていた(レビ11・7)。従ってユダヤ人は普通の状況では豚を扱うことは決してなかった。この時、弟息子は豚の世話を考えなければならないほど、絶望的な困窮にあったのである。

16 いなご豆 大きなさやの中に小粒の種子が入っている。これを枝につけたまま乾燥すると、甘みのある飼料になる(「エッセンシャル聖書辞典」)。だれも彼に与えてはくれなかった 人々の弟息子に対する扱いは豚以下であった。

17 我に返って 困難は人を現実に向き合わせる手段となる。彼は父のもとでは雇い人さえも食物があり余っていたことを思い起こし、父のもとにいたのはかり知

れない豊かさとの自分のはじめさに気づいたのである。

18 天に対して 「天」とは神に対する敬虔な思いから来る遠回しな表現。弟息子はまず神に対して罪を犯したことを認めている。罪はいつでも、人に対する以上に神に対するものである。もう、息子と呼ばれる資格はありません 父親に対する非礼のゆえに、息子として扱われるべき者ではないと考え、最低、生活でできるだけの賃金を得るために、雇人のひとりにしてもらおうとした。

20 父のもとへ ここで「彼の故郷へ」とか「彼の家へ」ではなく「父のもとへ」と言っているのは、父との関係の回復に焦点が当てられているからである。まだ家までは遠かったのに 父親は息子の帰還を期待し、目を凝らして待っていたのであろう。かわいそうに思い（ギ）スプラシクニゾマイ） 7月10日分参照。父は死にかけている自分の息子を心の底からあわれんだ。駆け寄って 父親が走り寄るといのは、古代オリエントの民族からすれば驚くべきことであった。口づけした 厳密には「何度も口づけした」とか「愛情込めて口づけした」と訳すことができる言葉で、父親がうわべだけでなく心から息子を受け入れたことを示している。

22 一番良い衣 社会的地位を表す。指輪 印章にも用いられ、権威を表す。履き物 自由の象徴。奴隷は普通、履き物を履かなかった。これらのものは、帰って来た息子を雇い人としてではなく、真に息子として迎え入れていることを表わしている。

23 肥えた子牛 特別なもてなし用に飼育されたもので、ここで用いたということは、これ以上にふさわしい機会は決まないと判断したからである。これは町民全体にふるまうに十分な量であったゆえ、この祝宴は大規模なものであっただろう。上流階級の家族はしばしば、息子の成人、結婚に際し、町民全体を祝宴に招待した。

24 死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから ここに父親のあふれるばかりの喜びが表現されている。いなくなっていた 「滅びる、失う、行方不明になる」の意味。命の源である神から背き離れた人間は、肉体の命があっても、霊的には死んでいるのである（エペソ2・1、5）。祝宴 イエスが神の国の象徴として好んで用いている（13・29、14・15〜24）。

参考図書 7月10日分と同じ。

聖書

ルカ18・9～14

タイトル

パリサイ人と取税人

暗唱聖句

だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。

ルカ18・14

目標

砕かれた心で神の赦しを受け取る。

導入

(後藤 真)

「わたしは、聖書の教えを全部守って、一つも罪を犯していません」と、言える人はいますか。なかなかそんなふうには言えないですね。でも、イエス様のまわりには、自分は神様の前に正しい人だと思い込んで、人を見下している人がいました。イエス様は、そんな人たちにこんなことをお話したのです。

ふたりの人のお祈り

ふたりの人が神殿にやってきました。お祈りするためです。ひとりにはパリサイ人。もうひとりには取税人でした。パリサイ人は、聖書の教えを一生懸命守る人たちでした。でもそれが行きすぎて、昔からの言い伝えや、自

分たちがきめた規則を守らない人を見下していたのです。

取税人は税金を集める仕事をしていました。取税人はローマの税金をイスラエルの人から集めていたので嫌われていました。中には、多く税金を取って自分のお金にする人もいました。

パリサイ人は立って、心の中でこうお祈りしました。「神様は、わたしは他の人たちのようによくばりな者、正しくないことをする者、姦淫を行う者ではなく、この取税人のような人ではないことを感謝します。わたしは一週間に二回断食をしています。すべての収入の十分の一を献金しています」。パリサイ人は、自分がどんなに立派な人かを自慢するお祈りをしたのです。

取税人は遠く離れて立ち、目を上に向けようとしないうで、胸を打って、後悔と悲しみの気持ちを表しながらお祈りしました。「神様、わたしは罪人です。お赦しください」。取税人は自分自身のことを考えると、神様に顔も向けられない気持ちでした。

神に義とされた人

みなさんは、パリサイ人と取税人のどちらが正しい人だと思いますか。イエス様はこう言いました。

「あなたがたに言います。神様に正しい者とされて、自分の家に帰ったのは取税人の方です。パリサイ人ではありません。自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです」。

イエス様の言うとおりですね。「ぼくはこんな立派なことをしています」「いつも悪いことばかりしている○
○くんみたいじゃないことを感謝します」なんてお祈りする人がいたらいやみな感じがしますね。

パリサイ人たちが聖書の教えを守って正しく生きようとしていたのはうそではありません。一週間に二回の断食は、決められていた断食より多いものでした。すべての収入の十分の一の献金も、他の人よりたくさん献金でした。でもイエス様は、パリサイ人の行いだけを見ていたわけではありません。どんな気持ちで聖書の教えを守ろうとしていたのかを見ていたのです。

へりくだる心

パリサイ人になくて取税人にあつたものは何でしょうか。それは自分を低くする気持ち、へりくだる心でした。神様の前や人の前で自分がどんなに立派かを自慢するのではなく、自分が罪人であると正直に認める気持ちでした。

わたしたちはどうでしょうか。神様や人の前で自慢できくらい立派な行いをして毎日を過ごしていますか。礼拝や献金をしているから、立派とまではいえないけれども、まあまあ正しい生活をしていると思いますか。それで教会に来ていない友だちを見下したり、ねたんだり、兄弟げんかをしてもぜったいに謝らない、というようなことはありませんか。

イエス様は、本当は神様に隠したい罪があるのに「ぼくは正しいんだ」「わたしは間違っていないんだ」と高ぶることが嫌いです。それよりも取税人に見習って、自分の本当の姿を認め、素直に悔い改める人にしていただきたいと思います。

♪イエス様ごめんなさい♪ (PW14、イン33)

聖書 ルカ18・9～14 テーマ パリサイ人と取税人

序論

(石田高保)

神から義とされているかどうかの対比が、このたとえ話ほど鮮やかにされているものはありません。神の私たちを見る目は、私たちが自分や他の人を見る目とはずいぶん違うことがわかります。神の見る目、つまり聖書的な価値観をつちかうことが私たちに変化をもたらします。

一、律法主義のわな

このたとえ話をしている相手は「自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たち」です。彼らはパリサイ人のことを指しています。いっぽうの取税人は、道徳的にも社会的にもパリサイ人の対極にいた人です。パリサイ人は「私が：奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します」と神に語りかけているところを見ると、近くで祈っている取税人を明らかに意識していることがわかります。自分の立ち位置は神との関係ではなく、取税人への宗教的な優越意識を持っていたというこ

とになります。つまりほんとうのところ彼の眼には神は入っておらず、ただほかの人と比較しているに過ぎなかったのです。神との関係によって立つのであれば、人はおのずから他の人との相対的な関係に縛られるようになります。神様から無条件で受け入れられていることがわからなければ、人と比べることによって自分の相対的な価値を見いだすほかはありません。それは必然的に人を羨むか、見下げるかのどちらかしかないことになります。舟からおか上に上がらない限り、揺れが収まらないのと同じです。

このように神を計算に入れない相対的な価値観は、自分の優位性を誇示せずにはアイデンティティーを保てないので、パリサイ人は自分の善行を神の前に誇ります。自分の宗教行為と引き換えに祝福してください、いや祝福して下さいさなければなりませんという思いでしょう。つまりギブ・アンド・テイクの関係を無意識のうちに神に要求しているわけです。しかし残念ながら神は取引をなさらない方です。神が与える場合、何かの見返りや取引ではなく、父親としての扶養によるからです。

二、律法主義からの解放

善行努力によつて神から受け入れられようという体質は、決して神の意図されたことではなく、アダムがエデンの園で神に背いた時に発生した悪癖と言つてよいでしょう。神の前に出るためにいちじくの葉で裸を隠そうとしたのは、まさに自分の行いによつて神に義とされようとしたことの現れです。アダムは神に依存しなくても、自分の力で人生を切り開けると考えました。その結果、神により頼むのではなく、自分の行いにより頼もうとする間違つた価値観が全人類にしみつくことになりました。その典型的な人物が、このパリサイ人です。彼はあまりに自分の行いを誇りにしているため、神により頼むことがわからないほどになっています。もつと言えば彼はほんとうのところ神を必要としてはいません。これこそ律法主義の正体であり、人間を神から勢いよく遠ざけるものです。今日それは完全主義、成果主義と言い直すことができます。これは人間の本性に深くからみついてゐるため、気づくことも、取り除くことも自力ではなしえず、ただみ言葉と聖霊によるほかはありません。いっぽう、取税人と言えばパリサイ人とは正反対で、自分の罪深さに打ちのめされています。彼は心底、神を

必要としてゐるのです。〈神様、罪人の私をあわれんでください〉という祈りほど、神から受け入れられる姿勢はないでしょう。なぜなら自分のほんとうの姿をさらけ出して神の憐みにすがっているからです。取税人の生活はお世辞にもほめられたものではなく、見た目で言えば真面目なパリサイ人に軍配が上がりそうなものです。しかし神に義とされたのはこの取税人のほうであつたとは、聞いていた人たちも私たちも啞然とするのではないでしょう。それは全ての人が生まれた時から身につけてきた律法主義的な価値観と相反するからです。しかし神の国は〈だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる〉世界です。もしクリスチャンの間でも見栄えや出来栄えで評価されるなら、そこは神の国ではないでしょう。神の前に自分は何者でもないと認めることが評価されるのです。

結論

では神に義とされる道とは何でしょうか。それは「人は律法を行うことによつてではなく、ただイエス・キリストを信じることによつて義と認められると知つて」ることにはかなりません（ガラテヤ2・16）。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

9 名指しはしていないが、イエスは明らかにパリサイ人に対してこの譬えを語っており、ここに彼らの特徴がにじみ出ている。自分**は正しいと確信**して、彼らは自らの義しさに確信を持つている。その姿勢は実は神に頼る行為ではなく自らに頼る行為へと促すものであり、それは私たちにも起こりうる姿勢である(Ⅱコリント10・7)。もう一つの特徴は、**ほかの人々を見下している**点にある。

10 **パリサイ人** 「分離された者たち」の意。由来は諸説あるが、彼らが律法、特にモーセ五書に記されている「聖め」の厳守において、聖くない者から「自らを分離する者」であったという説が一般的である。これは外から付けられたあだ名であった。**取税人** ユダヤ人は取税人を、外国、特にローマ政府のために働く人間であるという理由から「罪人」「異邦人」「遊女」同様憎んでいた。

11 **パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした**まず、パリサイ人の祈りの言葉に先立って、祈りの姿勢

(身体的姿勢、霊的姿勢とも)が語られる。立って 立って祈るのは、当時のユダヤ人の祈りの通常の姿勢である。しかし、ルカはここでただ単に身体的姿勢を語るのではない。「立ち」(13)より強い言葉、すなわち「自分を立てる」という意味で用いている。彼は人々の注目を集めるために、なるべく目立つところに立って、信心深そうな態度で祈ったのである。**心の中で** この祈りは自分自身に向かった祈りであって、神にささげられた祈りではなかった。それはもはや祈りではなく、独白とでもいいえるものであり、「立って」という姿勢と重ねると、演技とでもいいえる行為であった。**神よ。私が…感謝します** パリサイ人は、自らの功績を列挙する(12)のに先立って、自分以外の人間がいかに多くの罪を犯しているかを数え上げていく。ここにおける祈りの姿勢は、自分と他人との分離(パリサイ)である。

12 他の人々のようではないことを切々と語った後、自らがどんなに律法を忠実に守っているかを説く。**週に二度断食し** 律法は、年に一度の断食を規定している(レビ16・29)が、パリサイ人は、ユダヤ人皆のため、月の週二度断食したようである。**自分が得ているすべて**

のものから、十分の一を献げて 律法は、穀物畑と果樹園と群れの収入の十分の一に限っていたが、パリサイ人は、律法の規定のない「ミント、うん香、あらゆる野菜」の十分の一もささげていたようである（ルカ11・42）。

13 取税人は遠く離れて立ち 祭壇から遠く離れたのか、それとも人々から遠く離れたのかは諸説あつて定かではないが、いずれにしてもパリサイ人の自信に満ちた堂々たる態度とは対照的である。**目を天にむけようとせず** 通常のユダヤ人の祈りは、目を天に向けるのが一般的であつた。「ユダヤ人は通常、手のひらを上に向けて、腕を広げて、あたかも天の賜物を受け取るように、そして目も上げて立った」（ファラー）。**自分の胸をたたいて** この行為は、罪に対する深い後悔と悲しみの念を表す所作であつた。これらの祈りの行為から、この取税人の、罪のゆえに神のみもとに近づいて祈る道を閉ざされた自らの、苦悩と絶望の姿が見て取れる。**罪人の私** 単に「すべての者は罪人である」という意味ではなく、他でもないこの罪人の私、という意味が含まれた強い言葉で語られている。**あわれんでください**（ギ）ヒラスコマイ）は、和解する、あがなう、償う、赦す（ゆる）といった意

味で、特に霊的な苦しみに対して向けられている言葉である。すなわち、罪に苦しむ者を赦し、贖い、和解される神のあわれみを求める言葉なのである。

なお、この両者の祈りの更なる相違は、「私」という言葉にある。パリサイ人の祈りにおいて、「私」は常に主語として用いられていた。一方取税人の祈りにおける「私」は、「私を」という目的語として用いられていた。取税人は、自分自身に関して何も語ることはできない。彼は、自らを神の赦しの中におかなければ、生きることも死ぬこともできない弱い罪人として、ただ神のあわれみのみを乞い求めているのである。

14 あなたがたに言いますが 何か重要な宣言を、権威をもって語るときに慣用句（10・12、24、11・9、51、12・4、5、8、等）。**義と認められて** 義と認められるとは、神と人との正しい関係を表す言葉で、神のみこころになつてそのご支配の中に受け入れられる、という意味を表す。直訳は「神によって正しいと宣言された者、正しいと認められた者」となる。

参考図書 7月17日分と同じ。

聖書

I列王17・1～16

タイトル
暗唱聖句エリヤ① 生きて働かれる神
私が仕えているイスラエルの神、「主」は
生きておられる。

目 標

I列王17・1
生きて働かれるまことの神を信じ、仕える。

導入

(和田牧子)

毎日暑いですね。しっかり水分補給はできていますか？ 渴いた身体に、冷たいお茶やジュースはとってもおいしいですね。私たちの健康を守る飲み物や食べ物が尽きることがないようにと多くの人たちが働いてくださっています。そしてそれらの必要を与えてくださる、もののもととはどなたでしょうか？

生きておられる神様

旧約聖書の時代、たくさんの王様がイスラエルの国を治めました。今日出てくるアハブ王様は、それまでのどの王様よりも悪いことを行っただけです。イスラエルを愛し、導いてくれたほんとうの神様にそむいて、バアルというにせ者の神を拝み、偶像をつくり、

国中の人々にそれを拝むように命令したのです。神様はどんなに悲しく残念に思われたでしょう。

ほんとうの神様からつかわされた預言者エリヤは言いました。「私が仕えている主は生きておられます。私が何か言わないうちは、数年、露もおりず、雨も降らないでしょう。」ほんとうの神様は、雨を降らせ、私たちにいのちを与えることもできれば、それを止めることもできる方なのです。

養ってくださる神様

さて、イスラエルの王様アハブに対抗し、「バアルの神はウソだ！」と勇氣を出して宣言したエリヤ自身は、雨も露も降らない中で、どうやって生きていけばよいのでしょうか。怒ったアハブ王様がエリヤのいのちをねらうかもしれません。でも大丈夫。神様がちゃんと生きていける場所と方法を用意してくださっていました。

神様はエリヤに「ここを去って、東へ向かい、ケリテ川のほとりに行って、隠れなさい。あなたはその川の水を飲むことができます。また、わたしはカラスにあなたを養うようにと命じました。」

エリヤはその言葉にしたがって、ヨルダン川の東に

あるケリテ川のほとりに行って住みました。なんと、何羽かのカラスが朝と夕にエリヤのところにパンとお肉を運んできたのです。またエリヤはケリテ川の水を飲んで、生きのびることができました。神様のなさることは不思議であり、おもしろくもあり、すばらしいですね！

神様の恵みは尽きない

エリヤの言ったとおりイスラエルに雨が降らなかったために、ついにケリテ川の水も枯れてしまいました。これからどうやって食べていけばよいのでしょうか。神様は再びエリヤに言われました。「さあ、ツアレファテに行って、そこに住みなさい。そこに一人の夫を亡くした女性がいます。わたしが彼女に命じて、あなたを養うようにしていますから。」

神様は神様に信頼してお従いするエリヤをどこまでも見捨てないで、先に先にと必要を備えてくださっている方です。エリヤが神様の言われたとおりにツアレファテへ行くと、ちょうどそこに薪を拾い集めている一人の女性がいました。そこでエリヤはその女性に言いました。「うつわに水をほんの少し分けて、飲ませてくださいますか。」彼女が水を取りに行こうとすると、エリヤはさら

に「パンも持ってきてください」とお願いしました。

すると女性は悲しそうに「わたしには、かめの中に一握りの粉と、つぼの中に少しの油があるだけです。今わたしは帰って行って、わたしと息子のために料理し、食べて死のうとしているのです」と答えました。

エリヤは落ちついて女性に言いました。「恐れてはいけません。イスラエルの神様が言われます。『主が雨を降らせる日まで、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくなりません。』そしてその言葉のとおり、最後の粉と油のはずだったのに、あれれ…!? エリヤも彼女もその家族も、毎日おなかいっぱい食べることができました。

結び

主なる神様は今も生きておられて、私たちの毎日の生活に関わってくださいています。私たちの必要をすべてご存知で、十分に与えてくださる方です。いのちのないにせ者ではなく、生きて働かれる全世界の王様、主なる神様を信頼して歩みましょう。そしてエリヤのように神様のお手伝いをし、神様のメッセージを伝える人になりたいですね！

♪主はすばらしい♪ (ホ135、イン11、PW29)

聖書 I列王17・1・16 テーマ 生きて働かれる神

序論

(高橋頼男)

預言者エリヤはイスラエルの王アハブに言います。
「私が仕えているイスラエルの神、『主』は生きておられる」。エリヤのように私たちも、生きて働かれる神を知り、大胆に告白する者となりましょう。

一、祈りに答えられる神(1)

「イスラエルの神、『主』は生きておられる」。この言葉は、エリヤの生き生きとした信仰を言い表わしています。しかしこの言葉は誰でも言うことができる敬虔な言葉でもあります。生きておられる神をその実質をもって知り、生活の中で生き生きと告白する者でありたいものです。それは私たちの祈りを通して、祈りに答えられる神を経験することから来ます。その時私たちはこの言葉を生きた信仰の言葉として大胆に告白することができます。

エリヤは、偶像礼拝が国を覆いイスラエルが主にそむいて御名を汚している現状を憂い、激しく泣いて祈りました。そしてついに一つの確信を得ます。申命記11・16

「17にある神のみ言葉がなされる以外に、イスラエルが主に立ち返る道はないことを知りました。そしてアハブ王の前に立ち「私のことばによるのでなければ、ここ数年の間、露も降りず、雨も降らない」と宣言したのです。

「エリヤは私たちと同じ人間でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六か月の間、雨は地に降りませんでした」(ヤコブ5・17)。信仰は主義・主張や願望ではありません。神との生きた関係であり、祈りを通してのリアルな神経験です。

二、訓練される神(3)

神はエリヤに「身を隠す」よう命じられました。「身を隠すことを学ぶ人だけが、神の権威をもって人の前に現れることができる。…また、その所こそ、神の人がさらにまざる奉仕のために備えられる場所である」(沢村五郎『聖書人物伝』)。神がエリヤを訓練するため、最初に選ばれた場所は、ケリテ川のはとりです。訓練の目的は、神への完全な信頼と服従です。訓練の中心は、ケリテ川の水と鳥からすによって養われることを通し、どんな状況や環境にあっても、神と神の言葉に信頼して、そこに留まり続けることでした。ケリテ川の水は日々に涸れてい

き、もはや、あと一すくいの水を残して枯れ果ててしまふところまで来ました。しかしエリヤは、神の言葉に信頼して静かに留まり続けました。決して自分で自分を救うために立ち上がることをしません。まさに水が完全に涸れ果てたその時、主はエリヤに声をかけられました。〈さあ、シドンのツアレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしはその一人のやもめに命じて、あなたを養うようにしている〉。そこに、主の訓練の第二ステージが備えられていました。「不信仰は、神と自分との間に事情を置く。そのため雲を隔てて月を仰ぐように、神を拝することができない。しかし信仰は、事情と自分との間に神を置く。それゆえどんな事情環境の中にあつてもなお、泰然としていることができる。エリヤは、……ただ主の御手にささえられていた」(沢村五郎・前掲書)。

三、養われる神(4・5・6)

ヨルダンの東にあるケリテ川の場合は今日明らかではありません。当時も人里離れた所だったでしょう。だれでも、住みなれたところから離れ、寂しい場所に行くことには不安があります。どのようにして生きていくのか、どうして食べていったらいいのか、全く当てがあり

ません。もしエリヤに少しの躊躇ちゆうちよがあつたとしても、不思議ではありません。その時、神様は〈わたしは烏に、そこであなたを養うように命じた〉と約束されました。しかし、どうでしょうか。いくら、神様のおことばでも、果たして烏の養いに身を委ねることなど出来るでしょうか。しかし、エリヤは、神のことばに従いました。それは、エリヤを養うのは烏ではなく、(ツアレファテのやもめでもなく)そこに遣わされる神であり、自分が告白する生きて働かれる神であると信じたからです。

長く関西聖書神学校の学監、校長代行として勤められた向後昇太郎先生は「伝道者」でした。戦前、戦中、戦後と日本の一番厳しい時代に、ただ生ける神だけを当てに福音を携え、大阪府下、奈良の僻地へきちまで先生の歩かなかった地はないと言われます。向後師の座右の銘は、〈かめの粉は尽きず、壺の油はなくならなかった〉でした。

結論

祈りを通して生きておられる神を知り、その神の訓練を受け、生きて働かれる神はまた養いの神であることを知って全き信頼、徹底した服従、思い切った献身の生涯を主にささげましょう。

研究資料

(中島啓二)

預言者エリヤが登場するこの章は、冒頭の宣言(1)と、続く三つのエピソード、①荒野で養われるエリヤ(2)⑦、②粉と油の奇跡(8)①6、③やもめの息子の復活(17)②4から成るが、それらのつながりに目を留めて理解することが必要である。例えば、干ばつを宣言したことがエリヤの荒野行きの必要性を生み、ケリテ川が涸れたことが彼をツアレファテへと向かわせる。干ばつはまた食物の不足につながり、それが粉と油の奇跡の前提を生むのである。もちろんそれらは偶然的成り行きでそうなったのではない。「主」のことば(2、8)がエリヤの行動を決定づけ、さらにはエリヤを養う鳥ややもめさえも(彼らが意識しているかどうかは別として)主の命令に基づいて行動するのである(5、10)。

これら三つに共通する問題は死であり、その解決は命である。その答を与えることができるのは「生きておられ」る神(1)以外にない。そのことを、命のない偶像により頼む王や国民に判らせるために、この三年間の干ばつの期間が必要であった。またそれはエリヤの訓練期

間でもあった。すなわち、三つの出来事を通して、エリヤの姿勢は受動から能動へと移っていく。最初は単純に従い、養いを受けるだけであったが、最後は、率先して神に聞かれる祈りをささげたのである。「今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある【主】のことばが真実であることを知りました」(24)とのやもめの告白は、彼が攻撃に転じ、バアルとの対決に向かう準備が整ったことを知らせる合図と言える。その中で、鳥の養いを受ける従順は、決して次元の低い初歩ではなく、すべての基本となる大切な信仰の土台であったのである。

テキスト

1 ティシユベ人エリヤ ティシユベの位置は不詳。エリヤは「主(ヤ)はわたしの神(エリ)」の意で、まさに彼の使命を象徴的に表している。アハブ アハブと妻イゼベルの方針は、バアルを「主」に取って代わるイスラエルの神とすることであった。バアルとは、フェニキアに由来し、カナン人も崇拜した偶像で、稲妻と雨の神、そして豊穡ほうじょうをもたらす神とされていた。イスラエルの神 「アハブは、彼以前の、イスラエルのすべての王たちにもまして、ますますイスラエルの神、【主】の怒りを

引き起こすようなことを行つた」(16・33)。彼はイスラエルの王であるにもかかわらず、イスラエルの神、主を、自分の神としなかったのである。【主】は生きておられる 主なる神は「生ける神」であり、ご自身の民の必要に応じてくださるという点において、他のすべての「命なき」神々と根本的に異なる。私のことばによるのでなければ、ここ数年の間、露も降りず、雨も降らない 降雨と豊穡は言わばバアルの専門分野であり、この宣言は、バアルへの挑戦でもあった。雨が何年も降らないことは普通ありえないことで、偶然を頼みとするならば、バアルが圧倒的に有利であった。だからこそ、かえって、もしこの宣言どおりになるならば、主こそ神であることがはっきりと示される。19章における有名な対決は、この時すでに始まっていたのである。

3 ケリテ川 正確な場所は不明のワジ(雨期のみ水が流れる谷川)。鳥による荒野での養いは出エジプトの出来事を想起させる(出エジプト16・13)。身を隠せ エリヤを敵の手や飢きんから守るためであろう。

4 その川の水を飲むことになる 他の川が干上がる中で、真っ先に干上がるはずのワジに水があることは本来

あり得ないことで、生ける神の力の表れであった。烏ワジのような岩場に巣を作り、食物を貯える習性がある。7 しばらくすると、その川が涸れた 力及ばずということではもちろんなく、計画が次の段階に進むためであった。そしてエリヤはバアルの本拠地とも呼べるフェニキアに乗り込んでいくのである。

12・16 私には焼いたパンはありません… イスラエルへのさばきは異邦の地にも大打撃を与えたが、同時に恵みの御手は異邦の女性にも伸ばされた。まず私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい 自然界(鳥)を通して養われる主は、物質(粉と油)をも自在に支配して救いを実現される。主に信頼するならば、イスラエル・異邦人の区別無く主の祝福に与ることが出来る。その信頼の応答に向けて、エリヤはやめを励ました。【主】が、こう言われるからです。『そのかめの粉は尽きず、その壺の油はなくなるらない。』すべての根拠は人のわざではなく、主の言葉にある。

参考図書 注解書 S. J. DeVries (Word), R. Nelson (Interpretation), 服部嘉明(新聖書注解 旧約2)。その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

I列王18・20～40

タイトル

エリヤ② 火をもって答える神

暗唱聖句

火をもって答える神、その方が神である。

I列王18・24

目 標

神のために信仰をもって戦う。

背景

(櫻井めぐみ)

エリヤは旧約時代のイスラエルを代表する、偉大な預言者の一人です。イスラエルはアハブ王の時代に、バアルやアシエラという偶像の神々を拜むようになりしました。それはアハブの奥さんであるイゼベルの影響です。彼女はとっても怖い女の人でした。アハブはイスラエルの王様だったけれど、奥さんの言いなりでした。イスラエルが本当は神ではないものを拜んでいた時、その人たちの目を覚まして神のもとに立ち返るようにと遣わされたのがエリヤでした。この時イスラエルには、もう3年以上も雨が降らなくなっていました。それは、まことの神である「主が生きておられる」ことを示すために、神様がなさったことでした。バアルではありません。

生きていない神々と、生けるまことの神

しかし、イスラエルの本当の問題は、バアルを拜んでいたことではありません。エリヤはこう言っています。「おまえたちは、いつまで、どっちつかずによるめいているのか」。彼らはバアルと、まことの神である主の両方を拜んでおり、これは神様がとても嫌われることです。それはたとえて言うならば、結婚しているのに夫や妻以外の人と浮気をしているようなものです。イスラエルの人々は主を礼拝しながらバアルも拜んでいたので、エリヤは彼らに喝を入れました。「もし『主』が神であれば、主に従い、もしバアルが神であれば、バアルに従え」と。それでは、主がまことの神であることがどうしたらわかるのでしょうか。エリヤは言いました。「火をもって答える神、その方が神である。」と。一方、バアルはどうでしょうか。バアルは人間が造った偶像です。偶像について、聖書ではこう言われています。「袋から金を惜しげなく出し、銀を天秤で量る者たちは、金細工人を雇って、それで神を造り、ひざまずいては、これを拜む。彼らはこれを肩に担いで運び、それがあつたところに安置すると、それはそこに立ったままである。これはその場所から動かない。これに叫んでも答えず、苦しみから救って

もくれない」(イザヤ46・6、7)。それに対して、まことの神である主はご自身のことをこう言っておられます。「胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す」(イザヤ46・3、4)。主は人間が担いで運ぶようなお方ではありません。主ご自身がみんなのことを、生まれる前からその手に担いで、これからずっと年をとっても背負い続け、救われるお方なのです。

対決

そうしていいいよ、対決の時がきました。バアルの預言者たちは必死にバアルを呼びましたが、バアルは本当の神ではないので、うんともすんとも言いません。一方、エリヤは壊れていた主の祭壇を建て直して、イスラエル十二部族を表す石を置きました。その回りに溝を掘って、祭壇には薪といけにえの雄牛を載せ、仕上げにたくさんのお水を注ぎました。こんなことをしたら、火なんか絶対につけられませんね。人間の力では。しかし、主なら火をつけることが出来ます。本当の神だけ

が、それをする事が出来るのです。

勝利

エリヤはこれまでずっと主に従ってきました。アハブ王を敵に回し、イゼベルが主の預言者たちを殺しても、「私が仕えている万軍の【主】は生きておられます。」と信じて従い続けました。みんなも、神様を信じて生きようとするならば必ず戦いがあるでしょう。エリヤだって、もし主に従うことをやめていたら、アハブやイゼベルに追われることもなかったのですから。でもそれでは、圧倒的な神の勝利を体験することはできないのです。エリヤは主に向かって祈りました。「私に答えてください。【主】よ、私に答えてください。」教会の先生たちも、みんなこのように祈った経験があるはずですよ。聞いてみてください。「主は答えてくださいましたか？」先生たちは口をそろえて言うでしょう。火は下らなかつたかもしれないけれど、「主ははっきりと答えてくださった」と。そうして感動して言うのです。「主こそ神です。」

「主こそ神です。」みんなもそのように告白する信仰の歩みへと、主ご自身が導いてくださいますように。

♪エリヤの御神は♪(新聖歌40)

聖書 I列王18・20・40 テーマ 火をもって答える神

序論

(高橋頼男)

エリヤは偶像礼拝に落ちたイスラエルを目覚めさせ、彼らを偶像崇拜から救い出して主に立ち返らせるために一人立ち上がりました。そして、カルメル山に全イスラエルとバアルの預言者450人、アシエラの預言者400人を集めるようアハブに言いました。そこに祭壇を築いていけにえをささげ、主が神かバアルが神か、火をもって答える神を神とするという戦いをしかけたのです。その結果、エリヤの祈りに答えて天からの火が下りました。それを目の当たりに見た民はひれ伏し〔主〕こそ神です。〔主〕こそ神です〕と言ってバアルを捨て主に立ち帰りました。エリヤはバアルの預言者を捕え、キシヨン川に連れ下り殺しました。刑罰の厳しさは罪の深刻さでした。

一、よろめく民の前に一人で立つ(21)

エリヤは民の前に立ち、へおまえたちは、いつまで、どっちつかずによるめているのか。もし〔主〕が神であれば、主に従い、もしバアルが神であれば、バアルに従え

と言いました。エリヤの戦いと挑戦はアハブやイゼベル、バアルの預言者たちに対してだけでなく、よろめく民に対してなされています。民はバアル礼拝を行いながら、自分たちの神、主を捨てたという意識がありません。バアルにもいけにえをささげていただけ？ のことでした。しかし主とバアルの両方に仕え、バアル礼拝に抵抗せず、排除しないことは主に仕えていないことです(マタイ6・24、ヤコブ4・8、1ヨハネ2・15)。

今日も、同じ戦いが迫っています。私たちにとつて最も深刻な問題は異教や異端との戦いではなく、私たちのキリスト信仰や教会の中にいつの間にか「混淆主義」^{こんりゆう}が入り込んでいることです。クリスチャンとクリスチャンでない人との生活や行動に何の違いもなければどうでしょう。この世の性の混乱が教会に入ってきています。権力に迎合し、世の成功に感嘆し、大量消費に呑みこまれ、「貪欲」というバアル礼拝がクリスチャンや教会の中まで入り込んでいます。いつの間にか当たり前になつてしまった(クリスチャンとして本来ありえない)習慣や判断が教会の中で見うけられないでしょうか。私たちは、私たちを取り巻く文化の流れにいつの間にか

取り込まれてしまっているのです（ヘブル2・1）。

エリヤは、「主もバアルも：」ではなく、「主が神か、バアルが神か」、迷っている神の民にはつきり突きつけて戦いました。迷いよるめいているすべてのイスラエルの前に戦いを挑むエリヤは、自分で行っていることが主のみ言葉と確かな臨在の中でなされていること、神の干渉と見守りの中に置かれていることを完全に信じて立っていました。何と驚くべき信仰でしょう。この時代の中で、神のみ言葉に堅く立ち、生活と行動においてぶれない信仰が教会に必要とされているのではないのでしょうか。

二、壊れている祭壇を繕う（30）

エリヤは、この戦いにおいてまず、壊れている祭壇を繕い築き直しました。「壊れている祭壇」とは、主の民が主への礼拝をもはや失っている姿、崩れていた神礼拝の姿です。形式信仰や形式礼拝のみが残り、全てに命が失われていました。生きた神礼拝の回復こそ最優先されるべきことです。私たちは自分の信仰を主のみ前に吟味し、デボーションや礼拝生活が祝福され、本当に命あるものとなっているか主の前に問い直しましょう。壊れている祈りの祭壇を築き直すことから始めなくてはなりません。

エリヤは十二の石で主の名によって祭壇を築き、主の民が神の選びと契約による存在であることを改めて確認しました。教会がみ言葉によって整えられることです。祭壇の上に雄牛が備えられ、その上に大量の水が注がれました。自然的、人為的なあらゆる可能性を防ぎ、ただ神のみわざが現れるために備えがなされました。

三、天からの火を求める（36～37）

エリヤは民を自分のそばに近寄せ、神の前に進み出て「主」よ、私に答えてください」と訴えました。この戦いはエリヤの野心や自己中心の思いではなく、迷っている民に、主が神であり、エリヤが神の僕であってすべてが神の言葉に従ってなされたことが明らかにするためでした。祭壇の上に天からの火が下ったことを目の当たりに見た民はひれ伏し、「主」こそ神です。「主」こそ神です」と言いました。神が信仰の祈りに答えられる生ける神であり、また、イスラエルが本来この神の所有の民であることが明らかになったのです。

結論

神のためみ言葉に堅く立ちましょう。主は、主と教会のために立ち上がる人を求めておられます。

研究資料

(小平德行)

「数年の間、露も降りず、雨も降らない」とエリヤによつてアハブ王に宣告された神は、それから三年目になる時に、雨を地に降らせることをエリヤに予告された。そのためにアハブに会うように命じられる。再び雨が降るようになるためには民の悔い改めが必要であつたからである。そこで、主こそ真の神であることを示すための対決することになった。

テキスト

20 カルメル山 現在のハイファ南方で、エスドラエロンの谷から地中海の端まで南東から北西方向に伸びる約32 kmの長さの峰。標高約600 m。

21 おまえたちは、いつまで、どっちつかずによるめいっているのか。もし【主】が神であれば、主に従い イスラエルの民は主を捨てたつもりはないが、バアルにもいけにえを献げていた。しかし「だれも二人の主人に仕えることはできません」(マタイ6・24)とあるように、エリヤは民に対し、何に従うべきかを決断するように挑戦したのである。これは妥協を許さない提案であつた。

22 私一人が【主】の預言者として残っている。バアルの預言者は四百五十人だ この時のエリヤはひとりであることを全く恐れていなかった。彼は真の神に仕えているのであり、その神が用いられるならば敵が何人いても問題ではない。

24 そのとき、火をもって答える神、その方が神である神はこれまでも火を下してこられた(レビ9・24、士師6・21、I歴代21・26、II歴代7・1)。神は焼き尽くす火である(ヘブル12・29)。エリヤは、神は昔も今も変わらないことを信じて大胆な態度をとつて神を証しようとした。それがよい バアルは太陽神であり、熱はその要素であるから、この提案はバアルを拜む者にとつて受け入れずにおれないものであつた。

26、28 バアルの預言者は激しく叫び、身を傷つけることまでした。彼らの頼みは自分たちの熱心さであつた。

29 何の声もなく、答える者もなく、注目する者もなかった 何の兆候もない事を意味する。

30 壊れていた【主】の祭壇を築き直した ここに主を礼拝しなくなった民の姿が反映されている。かつては北イスラエルの中で神に忠実な人々が、この祭壇で礼拝を

ささげていたが、アハブとイゼベルの支配の下で自分たちの礼拝をささげることが許されなかったのかもしれない。祭壇を築き直すこと、つまり礼拝の回復が、神のみわぎのためにまず必要なことであった。

31 十二の石 現在の分裂状態を悲しみ、部族の一致を願われる神の願いを象徴する。

32 ニセアの種が入るほどの溝 1セアは約7.6リットル。おそらく祭壇の周りの溝の幅を意味しており、90cmそこそこのことであろう。

33 34 四つのかめに水を満たし、この全焼のささげ物と薪の上に注げ 神のみわぎ以外による自然発火、または何らかの人為的なわぎによる発火のあらゆる可能性を徹底して防ごうとした。またこれは主の御力に対するエリヤの確信を示すものでもあった。

36 39 ささげ物を献げるころになると エリヤは普段の礼拝の方法に準じて行った。私があなたのしもべであり、あなたのおことばによって私がこれらすべてのことを行ったということが、今日、明らかになりますようにここまでの一連の出来事は、すべてエリヤではなく神が計画されたことであった。そしてエリヤは自分がしもべ

であって、主の意思に従い、主の手の中の道具にすぎない者であることを表明している。彼は主にすべて明け渡し、ゆだねていたのである。そうすればこの民は、「主よ、あなたこそ神であり、あなたが彼らの心を翻してくださったことを知るでしょう エリヤは単に主が神であることを奇跡によって実証することを祈り求めただけでなく、イスラエルの回心を求めた。【主】こそ神です この民の承認の言葉自体がエリヤの祈りの答えであった。40 バアルの預言者たちを殺したのは気まぐれになされた残虐な行為ではなく、偽預言者に対して律法で命じられていることに従ってなされた必要な懲罰であった（申命記13・5、13 18）。この罪がいかに深刻であるかを示している。

参考図書 久利英二「列王記」『実用聖書註解』、舟喜信『新聖書講解・列王記』、ドナルド・J・ワイズマン『ディンデル聖書注解・列王記』（以上いのちのことば社）、ハーヴェー・E・フィンレー「列王記第一、第二」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇2』（イムマヌエル綜合伝道団）、他

聖書

Ⅱ列王2・15a

タイトル

エリシャ① 霊の二倍の分

暗唱聖句

では、あなたの霊のうちから、二倍の分を私のものにしてください。

Ⅱ列王2・9

目標

神の働きの継続のために用いていただきたいと願う者となる。

導入

(土屋開夫)

皆さんには、尊敬している人や先輩や先生がいますか？「あの人はスゴイ。すばらしい。あの人から色んなことを教わった。あの人のようになりたい！」と思う人。教会学校の先生を尊敬して、という子もいるかも知れませんね。

でも、その尊敬してるすばらしい人といつまでも一緒にいられる訳ではありません。学校を卒業したり、引越したり、その人が先に天国に行ってしまうかも知れません。もし、そんな事になったら、とっても心細いですね。そんな時はどうすればいいのでしょうか。

エリヤさんの弟子、エリシャさん

先週と先々週は、預言者エリヤさんが大活躍しましたね。エリヤさんは聖書の中で一番有名な預言者です。けれども、どんなに立派な「神様のしもべ」でも、いつまでも地上で活躍できる訳ではありません。やがて自分の役割を終えて、天国に帰る時が来るのです。ですから、その人の後を引き継いで神様の御用をしてくれる人、バトンタッチする人、難しい言葉で言うと「後継者」が必要です。エリヤさんの後継者、弟子に選ばれた人、それがエリシャさんでした。

別れの時

エリシャさんは、先輩であり先生であるエリヤさんとはばらく一緒にいて、大切な事を色々教わった事でしよう。神様のこと、信仰のこと、預言者の働きのこと。けれども、やがて別れの時が近づきました。エリヤさんは天国に帰らなければなりません。弟子のエリシャさんはどんな気持ちだったでしょう。「嫌だ、エリヤさんと別れたくない。もっとたくさんのお話を教わりたい。それに若いボクなんかじゃ、エリヤさんのような立派な働きは

8月

28日 礼拝メッセージ例

とても無理だ。一人にしないで欲しい!」、そんな思いだったかも知れません。エリヤさんが「ここにとどまっていなさい」と何度言っても、エリヤさんは「わたしはあなたから離れません」と最後までついて来ました。

けれども遂に別れの時が来ました。エリヤさんは最後に「あなたのしてほしい事を求めなさい」と言いました。するとエリヤさんは「では、あなたの霊のうちから、二倍の分を私のものにしてください」と言いました。当時、イスラエルの家の長男は、お父さんの財産を他の兄弟の二倍、受け継ぎました。つまりエリヤさんはエリヤさんに宿っている「聖霊様の恵みと力」を「私に受け継がせて下さい!」と求めたのです。正にそれはエリヤさんの後を引き継ぐエリヤさんにとって最も必要なものでした! なぜなら、神様の御用・働きは、人間の知恵や能力ではなく、聖霊様の力であるからです!

間もなくエリヤさんは、天から迎えに来た「火の戦車と火の馬」に乗って、天に引き上げられました。エリヤさんをお父さんのように慕っていたエリヤさんは「ああ、わが父、わが父!」と泣き叫びました。

でもエリヤさんには、エリヤさんに宿っていた聖霊様の恵みと力がちゃんと宿っていたのです! その後、エリヤさんは預言者としての働きを立派に引き継ぐ事となるのです。

まとめ

皆さんにイエス様の事を教えてくれたのは誰ですか? お父さん、お母さん、教会の先生ですか。大切な事は、その方が教えてくれた「イエス様を信じる信仰」をあなたが受け継ぐ事です! 先輩や先生のマネをするのではなく、あなたはあなたとして、信じる心「信仰」を受け継ぐのです。イエス様を信じる人には全員に、聖霊なる神様が宿ってくださいます!

そして、その次はあなたから誰かにその信仰を渡すのです! そうやって、信仰と聖霊と主の働きは、ずーっと受け継がれていくのですよ。

♪明日に向かいチャレンジ♪(PW58、イン76)

聖書 II列王2・1～15a テーマ エリシャ① 霊の二倍の分

序論

(小泉 創)

偉大な働きをなした人の後継者となるのは容易なことではありません。エリヤは預言者を代表する人物でしたが、それでもバアルとの戦いという大仕事を終えて疲れ切ってしまいました。神はエリヤの働きを引き継がせるためにエリシャをお選びになりました。今日の聖書箇所は、エリヤからエリシャへとバトンが渡される場面です。

一、エリヤの最後の旅

エリヤは自分が地上を去る時が来たことを悟り、最後の旅に出ました。エリシャもそのことを神から示されていたのでしょう。エリヤに従って行きます。エリヤはエリシャを連れて行こうとはしませんが、それでもエリシャから離れません。エリヤに従うことを決めてすべてを手放した時から、エリシャはエリヤに従い続けてきました（I列王19・20～21）。

エリヤはギルガル、ベテル、エリコと旅を続けます。

それらの町には預言者である仲間たちがいました。各地を訪問したエリヤの目的は明確にはなっていませんが、最後の別れをし、神の働きがまかされた彼らを励まし、あとのことを託そうとしたのかもしれませんが。預言者たちはエリシャに、エリヤが地上を去る日が近いことを告げますが、エリシャはそのことを知った上で淡々とエリヤに従って行きます。

ヨルダン川のほとりでエリヤが外套を取って水を打つと水が左右に分かれました。エリヤとエリシャは、仲間たち五十人が見守る中、ヨルダン川のかわいた土の上を渡っていきました。その光景はモーセに率いられた民が紅海を渡った出来事、ヨシュアに率いられた民がヨルダン川を渡った出来事を思い起こさせたことでしょう。まさしく、エリヤは神によって遣わされた神の人でした。

二、エリシャの願い

ヨルダンを渡ったエリヤは、エリシャのために何をしようかと尋ねます。エリシャの望みは「あなたの霊のうちから、二倍の分を私のものにしてください」ということでした。これはエリヤの二倍の働きを望んだのではあ

りません。長子の相続分をあらわしている言葉ですから、エリシャはエリヤの後を継いで神の働きをしていくための霊の賜物を求めたのです。

これはエリヤであつても、かなえることはできません。霊の賜物は神が与えられるものだからです。私たちも賜物や責任、果たすべき役割、歩む道のり、さまざまなことを主に求めます。しかしすべては主の手の中にあり、すべてのことに主の時と方法があるのです。人と比べることも意味がありません。神様が任せてくださっている働きのための賜物を求めることが、私たちのなすべきことです。

エリヤとエリシャが語り合っているとき、彼らの間を火の戦車と火の馬が隔て、エリヤは竜巻に乗って天にのぼって行きました。エリシャがその光景を見ることがゆるされたのは、主がエリシャを選ばれたしるしでした。

三、受け継がれた使命

エリヤとエリシャがヨルダンを渡るまでの道のりは、イスラエル民族がカナンに入ってきたときの逆の道筋でした。そして今、主はエリヤに代わる新しい預言者エリ

シャを民のもとにお送りになるのです。エリヤの外套を取り上げたエリシャは、エリヤがしたのと同じようにヨルダン川の水を打ちました。神の奇跡によって、水は分かれ、エリシャはヨルダン川を越えていきました。エリヤと共におられた神は、確かにエリシャと共におられ、御力をあらわされます。それを見た五十人の仲間たちは、(エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている)と証言しました。神の働き人は神によって選ばれます。主なる神を愛し、どこまでも従っていこうとする者を豊かに用いてくださいます。

結論

私たちも多くの先輩たちに養われ、導かれてきました。しかしエリヤとエリシャの働きが全く同じではなかったように、神様も今の時にふさわしく私たちを用いてくださることでしょう。私たちもエリシャがエリヤを慕ってそのあとをについて行ったように、どこまでも従ってまいりましょう。

研究資料

(辻林和己)

1列王19・21はエリシャが預言者エリヤと出合い、彼に従ったことを告げる。

今回の個所は、エリシャが、神によってエリヤの後継者として立てられるときの出来事が語られている。

テキスト

1 竜巻(ハシユアラ)は、「つむじ風」(口語訳)や「嵐」(新共同訳)とも訳されている。聖書では火、雷、地震等のように神の顕現を示す現象とされる(ヨブ38・1、イザヤ29・6参照)。

2 「主」は生きておられます。あなたのたましいも生きています。当時の誓いを述べる時の慣用句。エリヤとエリシャのここでのやり取りは、この後、ベテル、エリコでも繰り返される(4、6)。

3 預言者の仲間たち 原文は「預言者の子ら」。エリヤの指導を受けていたり、その影響下にあった預言者集団。町ごとにまとまった集団があり、彼らはエリヤが地上から去る日が近いことを神から示され、知っていた。私も知っていますが、黙っていてください。この言葉の

意味については諸説ある。預言者の仲間からエリヤの最後のことを聞いたエリシャがそれに対して冷静に対処できるかの試みであり、彼は適切に答えたという説。エリヤが地上を去る日が近いことをエリシャも知っている。このことをエリヤに知られるのをエリシャは好まなかった。故にエリヤに配慮して彼らを黙らせようとしたのだという説等がある。預言者集団とエリシャとのやり取りは、エリコでも繰り返される(5)。

7 預言者の仲間たちのうち五十人は、行って遠く離れて立った。彼らはエリヤがどのように昇天するのかを知りたいと思って二人から離れた所に立っていた。

8 水を打った。すると、水が両側に分かれた。エリヤとモーセの姿が結び付けられて語られている。かつてモーセは、イスラエルの民をエジプトから導き出す際に、彼の権能の象徴である杖を用いて紅海を渡った(出エジプト14・21・22参照)。同じように、エリヤも彼の丸めた外套を用い、神からの力によってエリシャと共にヨルダン川を渡った(ヨシユア3・17参照)。

9 あなたの霊のうちから、二倍の分。当時、長子は、他の兄弟の二倍の取り分を受け継いだ(申命記21・17)。

エリシヤはエリヤの後継者、指導者となるためにこのことを求めた。

10 あなたは難しい注文をする 人（エリヤ）が人（エリシヤ）に「霊」（神の霊、霊の賜物）を与えることはできない。神のみが人に霊の賜物を与えることができる。私があなたのところから…、そのことはあなたにかなえられるだろう エリヤは、神がエリシヤを預言者、指導者として立たせられるかどうかを、全く神に委ねた。

11 火の戦車と火の馬 原文では「車」は単数。「馬」は複数。「万軍の主」のように主の力を戦力で表現したものの。

12 わが父 エリシヤにとってエリヤは恩師であり、父親のような存在であった。イスラエルの戦車と騎兵たち戦車と騎兵は神の霊的臨在の力とイスラエルに対する強力な保護とを象徴するもの。エリヤはイスラエルにとってそのような存在だった。それを二つに引き裂いた驚くべき突然の現象の中で、エリヤが自分のもとから去ったことへのエリシヤの悲しみの気持ちの表われ。

13 外套を拾い上げ エリシヤはエリヤの預言者としての職務の象徴である外套を拾った。これはエリシヤにエ

リヤの務めが引き継がれたことを示す。ヨルダン川の岸辺に立った エリシヤはヨルダン川の東岸に立った。彼が目指すのは、ヨルダン川西側のカナン地域である。

14 エリシヤが水を打つと、水は両側に分かれ エリヤのときと同じ奇跡（8）が起こった。神がエリシヤを後継者として立てられたことのしるし。「エリヤの神、【主】は…」とエリシヤが呼びかけ、尋ねた神は、このときすでに「エリシヤの神」として共におられた。

15 エリヤの霊がエリシヤの上にとどまっている 預言者の仲間たちには、このことが目に見える何らかの形で示されたのかもしれない。あるいはヨルダン川での奇跡を見てこう言ったのかもしれない。いずれにしても、彼らはエリヤの最後の姿は見えていない。それを見たエリシヤは、9節で願った「エリヤの霊」を継ぐ者とされた。この後、エリシヤは、エリヤの正当な後継者として、神に従い、尋ね求めつつ、様々な体験を重ねながら、自分に与えられた使命を果たしていく。

参考図書 D・ワイズマン「列王記」『ティンデル聖書注解』（いのちのことは社）、服部嘉明「列王記」『新聖書注解・旧約2』（いのちのことは社）他

聖書

Ⅱ列王4・1〜7

タイトル

エリシャ② 器と油

暗唱聖句

器を借りて来なさい。空の器を。それも、一つや二つではいけません。

Ⅱ列王4・3

目

標

神の偉大な働きを受け取るために備える。

油の壺の奇跡

(櫻井めぐみ)

エリシャの預言者仲間が借金を残して死にました。その二人の子どもが借金のかたに奴隷にされようとしています。その死んだ仲間の奥さんが、エリシャのもとに助けを求めてやってきました。その家で少しはお金になりそうなものといったら、油の壺一つだけです。でもそれだけではとても足りません。しかしエリシャが、空の器を近所の人からたくさん集めさせて油を注ぐと、器の分だけ油が増えたというのです。奥さんはその油を売ることで、借金をすべて返済し、子どもを守ることができました。

エリシャとイエス様

実はこの出来事は、イエス様が行った奇跡とよく似て

います。それは、ヨハネの福音書の2章に出て来る、カナの婚礼での出来事です。結婚式の披露宴で、ぶどう酒が足りなくなっていました。その時は、水がめに汲んだ水が全部ぶどう酒になったという奇跡でしたが、エリシャが行った油壺の奇跡は、このイエス様の奇跡を連想させるものです。他にも、イエス様とエリシャが行った奇跡で似ているものがたくさんあります。エリシャはもちろん人間です。しかもイエス様が地上に人となって生まれるよりずっと昔、800年以上も前の人です。神様はイエス様を地上にお遣わしになる前に、預言者たちを通してたくさんのおみわざを行われました。その一人のエリシャは、ずっと後の時代に来られるイエス様を前もって指し示すような働きを、神様の力によって行ったのです。

イエス様は地上での生活の間、このように言われました。「だれでも渴いているなら、わたしののもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります」(ヨハネ7・37・38)。でも、イエス様と言われたのは、喉の渇きのことではありません。「渇く」という言葉の意味は、喉の渇きのほかにもう一つありま

す。それは心の渇きのこと。「満たされない気持ちがい
らだたしいほど高まる」っていう意味なんです。みんな
はそういう気持ち、経験したことあるかな：なんとなく
寂しいと感じたりとか。そういう「渇き」は、人間なら
誰もがもっているものなんです。エリシャのお話では、
生活に困ったやもめの人が、神様からお金の面での必要
を満たしていただきました。もちろん神様はそういうこ
とも助けてくださいます。でもそれ以前に、人間には魂
の奥底に深い欠乏、飢え渇きがあります。この「渇き」
は、たとえ生活に困っていないなくても、すべての人が持っ
ているもの。魂の、最も深い願いです。でもその渇きは、
自分では満たすことができません。仲良しのお友だちに
満たしてもらうことも全く無理です。それは私たちがみ
んな罪人だからです。みんな、罪人である惨めさから自
分を救い出すことができません。満たされない思いを自分で
満たすこともできません。そのためには、イエス様が十
字架にかかって死んでくださらなければなりません。し
た。イエス様のもとにこそ、本当の満たしがあるのです。
神様ほど私たちの奥深くを知り、愛せる人は誰もいませ
ん。だから私たちはこの渇きが癒やされ満たされること

を、ただ神様ご自身に求めるべきなのです。

空の器を

満たしていただくためには空っぽの器でなくてはなり
ません。エリシャは死んだ仲間の奥さんに言いました。
「器を借りて来なさい。空の器を。それも、一つや二つ
ではいけません」。私たちはまるで空の器のようなもの
なんです。自分の内には何にもない、空っぽの器。自分
で自分を満たすことができない、空の器です。「間に合っ
てます」とか、「大丈夫です」とかって言うんじゃないくて、
空のまま神様のところに持つて行きましょう。イエス様
を信じる人は、その人の心の奥底から、生ける水の川が
流れ出るようになります。そして神様から与えられた永
遠のいのちへの水が、今度はみんなからわき出るようにな
るのです。神様がみんなのことを、世界に祝福をもた
らす泉としてくださいます。空の器のまま、神様のもと
に行きましょう。そして、溢れるほどに満たしていただ
きましよう。満たされて初めて、自分もまた神様のため
の偉大な働きをする者となれるのです。

♪両手いっぱいいの愛♪

(新聖歌483、イン41、ホ146、P W 13)

聖書 Ⅱ列王4・1〜7 テーマ エリシャ② 器と油

序論

(小泉 創)

「あなたの口を大きく開けよ。わたしが それを満たそう」(詩篇81・10)という聖句に、励まされることがあります。自分はどれくらい神様に期待しているだろうか、もっと期待してはどうか、と。しかし私たちの直面する現実には本当に厳しく、どのようにしてそれを乗り越えられるか、途方に暮れることもあります。

今日の聖書箇所には、信仰に堅く立ち、一見それが何になるのかと思われるようなことを行い、大きな祝福を受けた人々が登場します。

一、危機の中で

神に忠実に従ってきた一人の預言者が亡くなりました。エリシャの預言者仲間です。その妻がエリシャのところに駆け込んできて、夫が残した借金のかたとして二人の子どもたちが奴隷として売られようとしていると叫びました。大切な同労者の家族の危機に、エリシャの心

はひどく傷んだことでしょう。神に従って生きる者にも容赦ない現実が襲い掛かってくることがあります。エリシャには借金を肩代わりするだけの財力はありませんでした。しかし神がエリシャを通して、ご自分を愛する者を救う道を開いてくださいます。危機の中で、神様のあわれみのみわががあらわされようとしています。

二、神に期待する

エリシャの師であるエリヤは、かつて一握りの粉と少しの油しかもたないやもめの家族と過ごしたことがありました。神による奇跡のわざは、わずかなものをみんなで食べても減らないようにしてくださったのでした(Ⅰ列王17・8〜16)。エリヤの後継者とされたエリシャをも神は豊かに御用いくださいます。

預言者の妻の家にはもはや油の壺一つしか残されていませんでした。どうしたらここに希望を見出すことが出来るでしょうか。しかしイエス様がなされた五千人の給食の奇跡はどうだったでしょう。一人の子どもが差し出した二匹の魚と五つのパンは、弟子たちの目にはなんの足しにもならないと思うようなものでした(ヨハネ6・

9)。目の前の必要はあまりにも大きいのです。しかしイエス様は小さなさげものを用いられて、そこにいたすべての人を満たし、なおあまりあるようにしてくださいました。わたしたちにはこれが何になるだろう、と思われるものでも、神様の手に渡されるならば豊かに用いられます。

エリシャは近所から、空の器を沢山借りてくるように告げました。入れるものなどないに等しいのに無駄なことだ、と思えばそれまでです。しかし預言者の妻は、指示に従って器をたくさん借りてきました。そしてエリシャの指示通り隠れた場所で子どもたちと一緒に油を器に移しはじめました。子どもたちが次々に器を持ってくると、母親は油をそそぎます。一びんの油が次々と器を満たし、けれども尽きることがないのです。備えた器がなくなったときに、油はとまりました。信仰によって備えた分だけ、主は満たしてくださいました。危機的状況であったこともさることながら、預言者であった夫と共に、妻も子どもたちも主を畏れ、愛し、従ってきた生活があったからこそ、いざというときに信仰を働かせることができたのでしょう。

三、神様の満たし

エリシャは、預言者の妻にそれらの油を売って借金を返済し、残った分で今後、生活していくことができること告げました。主は窮状を乗り越えさせたばかりではなく、これからの生活のための必要をも満たしてくださいましたのです。

母親と一緒に油を注ぎ、神の助けを体験した子どもたちにとっても、この出来事は大きな励ましになったに違いありません。主に従うことの幸い、小さなものを顧みてくださる主のご真実を繰り返し思い起こしたに違いありません。試練を通して、私たちはさらに強く神に結ばれるのです。

結論

誰もが想像できない方法で、神はこの家族を養ってくださいました。私たちが信じている主は無尽蔵の恵みを備えてくださっています。主の恵みを小さく考えず、大きな期待をもって従う用意をしていきましょう。

研究資料

(加藤 満)

預言者エリシャはエリヤを通し「霊の…二倍の分」(2・9)を得た預言者であり、彼の周囲に「預言者の仲間」と称される預言者集団が成立していた。主はエリヤに対しそうであつたように、エリシャと共におられ、「主」の手(3・15)「主」の目(3・18)などが彼に臨んでいた。

エリシャもエリヤと同様に神の多くの奇跡に用いられたが、この事はそのまま彼らが仕えた時代が如何に霊的・社会的に厳しい時代であつたかを示している。しかし主の御業は魂の救いに留まらず、社会領域においても発揮される。この個所はエリヤの「ツアレファテでの奇跡」(1列王17・8・16)とイメージが重なる。主はエリシャを通し、厳しい時代の弱者である主の預言者の一家を経済的な危機から救い出すのである。

テキスト

1 あなたのものも 身分が上の者への一般的な敬語。妻の一人 宗教家としての預言者は社会の中で十分かつ

正当な立場で扱われてきていなかった。しかも主人を失った女性は今更、社会的立場として弱者である。**主**を恐れていました。ところが「にもかかわらず」「ワーウ」へブル語接続詞」という反意の語が使用されている。

夫は主を恐れていた「にもかかわらず」、子どもを奪われるという母親にとって自分の死よりも辛い状況が襲いかかる。この理不尽さをエリシャへ訴え、主へ訴えている。**子どもを自分の奴隷にしようとしています** 本来、同胞を奴隷とすることは律法で禁止されていた(レビ25・39)。

2 油の壺一つ 旧約聖書中ここにだけ出てくる容器名。おそらく油注ぎ用の小瓶を指す。女性は何もないことを強調するためにこの言葉を用いている。「それほどに何もないのです」。しかし、神の御業は私たちが無いにも等しいと考える小さなものから始められる。

3 器を…空の器を 油が豊かに供給されることを示すため「近所の皆から」と始まり、後半では語順が入れ替わり「空の器」を冒頭にし、器への注目を促している。**それも、一つや二つではいけません** 「一つや二つではいけません」という否定文は、むしろ最大の肯定的内容を意味している。エリシャは女性への問いかけと、励ま

しの言葉によって彼女の信仰と行動を引き出している。ここで油の量は制限されていない。女性が空の器を多く準備することをためらわない限り、神は油を満たし続けるのである。

4 背後の戸を閉めなさい 公開しない事を指示されている。しかも、この奇跡はエリシヤが不在の場で起きる。これはイエスの姿と重なる（マタイ6・6）。

5 油を注ぎ入れた 継続表現で「注ぎ続けた」。これは信仰の継続行為を強調している。近しい表現はヨハネ2・7。子どもたちの「運び続ける」という継続行為と母親の「注ぎ続ける」という行為は対照的に表現され、信仰の行為が親と子の共同の行為であることを物語っている。

6 油は止まった これ以上に油の供給が受けられないほどに十分に彼女の必要が満たされた事を指す。

7 負債を払いなさい 貸主の権利を侵害せずに、一家を救う事と、同胞の奴隷売買を防ぐ事にも成功している。あなたと子どもたちは 強調表現。主を恐れつつも苦しむ預言者一家に神は奇跡を直接経験させた。母親の一番の心配を慰め、再び御名を崇めさせる。神は地上の支配

者のように救済に手をこまねく方ではない（申命記10・18、ヤコブ1・27）。そして、神が賜るものはしばしば有り余る（マルコ6・43、エペソ3・20）。

神の偉大な働きは小さな所から始まる。主イエスのパンの奇跡、更に言うならば御降誕はその真理を物語っている。私達の愛も能力も小さなものしか持ち合わせていないという事は、献げない事のいいわけにはならない。神は無きに等しくとも、心を込めて献げられたものを通して、御業を進めることを喜ばれる神なのである。

参考図書

ドナルド・J・ワイズマン著、吉本牧人訳『ディンデル聖書注解 列王記』（いのちのことば社）、『新聖書注解 旧約2』（いのちのことば社）、高橋秀典著『哀れみに胸を熱くする神』（いのちのことば社）、他

聖書

Ⅱ列王5・1～14

タイトル

エリシャ③ ナアマン將軍のいやし

暗唱聖句

身を洗ってきよくなりなさい。

Ⅱ列王5・13

目 標

隠れた悩みの解決を、神様からいただく。

導入

(和田牧子)

皆さんは「こんなこと誰にも言えないよ…」という悩みはありませんか。誰にでも一つか二つはそのような悩みがあるでしょうね。イライラした時、大人の見ていないところで弟や妹にあたってしまうとか、「もうやめなぐちゃ」と思いながらも、どうしてもやめられないことがあるとか…。今日は、かくれた悩みを神様に解決していただいた人のお話ですよ。

ナアマンの悩み

「痛い、苦しい」(涙)「今日もアラムの国の軍の隊長ナアマンはうめき声をあげています。ナアマンはアラム王様からみとめられ、国民たちに尊敬されているりっぱな人でした。でも見るからに強そうな外の姿からは想像もできない悩みがあったのです。実は彼の身体中が皮膚

の病気で、ただれて、痛くて、がまんできないほど苦しかったのです。この時代どんなに手をつくしても治らないツアラアトという重い病気でした。

アラム王様はかつて戦いに出たとき、イスラエルの地から一人の若い娘をとらえて連れてきていました。この娘はナアマンの妻のお手伝いをしていました。この娘が言いました。「もし、ご主人様がサマリアにいる預言者のところに行かれたら、その方がご主人様のご病気を治してくださるでしょう。」

立派な將軍ナアマンの病気の悩みを、この娘は身近で見ているわかったのでしょう。そしてこの病気を治してくださる、生きて働かれる神様がおられることを、この娘は知っていました。

エリシャのことばのとおり

娘のひとことがきっかけでイスラエルの預言者エリシャのことを知ったナアマン。たくさんの贈り物をもって、アラム王様にも「ぜひ、行つてきなさい!」と送り出されて、ついにナアマンはエリシャのお家にまでたどり着きました。ところがそこにいたのはエリシャではなく、使いの者でした。

使いの者はエリシャのことを伝えました。「ヨルダン川へ行って七回あなたの身体を洗ってください。そうすれば、あなたの身体はもとどおりになって、きよくなります。」

さあ、ナアマンさんはどうしたでしょうか。すぐにそのことばどおりにしたでしょうか？ いえいえ、かんかに怒ってしまったのです。「なんということだ。私はエリシャがじきじきに出てきて、彼の神、主の名を呼んで、私の病に手を置き治してくれると思っていた。それなのに、ヨルダン川で洗えだど？ それなら私の国に流れている川のほうがよっぽどきれいだ！」

そして来た道を引き返そうとしたのです。その時、ナアマンのしもべたちが追いついてこう言いました。「ご主人様。あの預言者に何かむずかしいことを言われたら、あなたはそれをなさったではありませんか。あの人は『身を洗ってきよくなりなさい』と言われただけなのですから、そのとおりになさったらいかがですか？」

「うん、それもそうだな。よし！」気を取りなおしたナアマンはヨルダン川へと下って行き、一回、二回：そしてついに七回！水につかりました。するとどうでしょう。

う。ナアマンの皮膚は小さい子どものようにつやつやし、すっかりきれいになったのでした。預言者エリシャをとおして、神様はナアマンに働いてくださいました。不思議なように一人のイスラエルの娘や、しもべたちのアドバイスも用いて、いやしと回復の道へと、神様が導いてくださったのですね。

神様のお言葉に従う恵み

私たちもナアマンのように隠れた悩みがあるかもしれません。でも神様は皆さん一人ひとりの悩みを良く知ってくださいています。そして一番良い解決方法を用意しておられます。私たちは一つ一つ、神様のお言葉と方法に従うだけで良いのですね。

そして、隠れた罪もそのままにはしないでしょう。か。神様は、イエス様の十字架の血によってすべての罪をきよめてくさいます。ナアマンが神様のいやしの方法を「ばかばかしい！」と拒否していたら病気のままだったでしょう。私たちも神様が与えてくださっている救いの道を「ありがとうございます」とそのまま受け取るだけで良いのです。

♪主の力を♪（イン71、PW25）

聖書 Ⅱ列王5・1～14 テーマ ナアマン將軍の癒し

序論

(高橋頼男)

アラムのナアマンは、王に絶大な信頼を置かれる偉大な將軍でした。しかし彼には隠れたところに大きな悩みがありました。それはツアラアト(重い皮膚病)にかかっていたことです。これまでさんざん治療のために手を尽くしましたが、一向によくありません。ナアマンの家には奴隸となっていた一人のイスラエル人の娘がいました。彼女はナアマンの悩みを気の毒に思い、イスラエルにはツアラアトをいやすことができる神の預言者がいることを語りました。そのことを伝え聞いたナアマンは、さっそくアラム王に許しを願い出しました。そして、イスラエルの預言者に会うために王の親書と多くの贈り物を携えてイスラエルの国にやってきました。

一、ナアマンの悩み(1)

〈この人は勇士であったが、ツアラアトに冒よろいされていた〉。ナアマンは、表向きは立派な鎧よろいを身に纏まとう勇士でしたが、その身体はツアラアトを患い、肉はただれ、腐っ

ていたのです。それはどんな医者にかかり、どんな薬を用いて治療を試みても治らない厄介な病気でした。誰でも隠れた内面の悩みというものがあります。自分で隠しているけど、内面は人前にはとてもお見せできないものです。しばしば自分自身を打ちのめし、痛めつけ、苦しめ貫く問題です。私たちもそのような内面の悩みを抱えていることがないでしょうか。私たちの罪(肉)の問題はまさしくそれです。ナアマンが抱えていた内なる悩みは、私たちが抱えている罪の問題、醜い肉の姿ではないでしょうか。罪は自分では解決できません。何度も試みて失敗してしまいます。肉の問題は、自分の内にさらに深くしみ込み、食い込む内面の問題です。

「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ローマ7・24)と、私たちもパウロと共に叫んだことはないでしょうか。この罪は伝染し、私たちを破壊し、やがて死に追いやります。「罪の報酬は死です」(ローマ6・23)。この問題の解決はどこにあるのでしょうか。

二、イスラエルには神の預言者がいる(3)

〈もし、ご主人様がサマリアにいる預言者のところに

行かれたら、きつと、その方がご主人様のツアラアトを治してくださいでしょう。イスラエルから捕えられてきた一少女の言葉は、病に苦しむナアマンにとって暗闇に差し込む光、「福音」そのものでした。なんとしても、どんなことをしても、その神の預言者のところに行つて、親しく出会い、患部に手をおいてお祈りしてもらつて癒していただきたいと切に願ひ、決心してイスラエルにやつてきたのです。「イスラエルには、病を癒す神の預言者がいる」との一人の小さな者の証しが、大きな働きをなしました。

三、行つて七たび身を洗いなさい(10、14)

神の預言者をようやく探し当てたナアマンは、家の門口に立つて、はるばる訪ねてやつてきた目的を告げます。しかし、取り次ぎのしもべが顔を出すのみで、神の預言者(エリシャ)は会ってくれません。ヨルダンに身を浸し、七度そうしなさいと伝えるのみでした。ナアマンは、怒り心頭です。アラムの偉大な大勇士である自分がわざわざ王の親書と贈り物を携えてイスラエルにまで来ているのに、怒つて去ろうとするナアマンにしもべたちが言いました。(難しいことを、あの預言者があなたに命

じたのでしたら、あなたはきつとそれをなさつたのではありませんか。あの人は『身を洗つてきよくなりなさい』と言つただけではありませんか。)(そこで、ナアマンは下つて行き、神の人が言つたとおりに、ヨルダン川に七回身を浸した。すると彼のからだは元どおりになつて、幼子のからだのようになり、きよくなつた)のです。謙遜とへりくだりをもつてみ言葉に従ひ、水の中に下つていき、その病によつてただれた身を水に浸すのです。自分が、癒し難い罪をその身に負うものであることを認め、キリストの死と葬りのバプテスマにあずかり、共に死に、共に生きるといふ恵みに思い切つて浸されましょう。キリストの血しよのきよめに与あずかりましょう。

「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます」(Iヨハネ1・7)。

「心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもつて真心から神に近づこうではありませんか」(ヘブル10・22)。

結論

隠れた内面的な悩みがあるなら、今こそへりくだつて、神のきよめと癒しを求め、神の解決をいただきましょう。

研究資料

(小平德行)

ここはナアマンのツアラアトのいやし(きよめ)の記事であるが、ただいやしだけにとどまらず回心にまで至った(15)。当時は多くのユダヤ人が預言者の訓告を気にも留めない時代であり、多くのツアラアトの患者がいたが、誰もきよめられることはなかった。その中で異邦人であるナアマンだけが、預言者による神の言葉に従い、きよめられたのである。イエスはこの事をご自身の郷里の人々の不信仰を指摘する時に語っている(ルカ4・27)。

テキスト

1 ナアマン アラムでは一般的な名前で「慈悲深い」を意味する。**【主】が以前に、彼を通してアラムに勝利を与えられた** これは1列王22章のアハブ、ヨシヤファテ連合軍とアラムとの戦いのことかもしれない。異邦人も主に用いられる器である(イザヤ10・5、44・28)。ツアラアト は旧約聖書においては種々の病気や皮膚病に用いられている。様々の腫れ、かさぶた、白斑、明るいあるいは暗い斑点、かさかさの皮膚などの特徴を伴う。また羊毛、麻、革製品のかびや、壁の真菌類の特徴も表す。

聖書協会共同訳では、律法で規定された病という意味合いで「規定の病」と訳されている。

2-3 一人の若い娘 この少女はナアマンの癒しと回心において重要な役割を果たした。彼女はアラムの略奪隊に捕えられて連れて行かれたが、主に遣わされたといえる。名も無き捕われ人であったが大胆に証しをした。いかなる境遇も福音の前進の機会となり得る(ピリピ1・12)。治してください この章ではこの病について「治す」と「きよめる」の二つの言葉が使われている。「治す」という言葉には「動かす、取り除く」という意味がある。つまり病から人を動かす、自由にする、または症状を取り除くということである。ツアラアトはイスラエルでは宗教的な意味合いで扱われ、「きよさ、汚れ」の問題とされている(レビ13章)が、異邦人にとってはいやされるべき病気として扱われている。

5-6 私がイスラエルの王に宛てて手紙を送ろう アラムの王がイスラエルの王に手紙を書いたのは、預言者も王の支配下にあり、王からの指示で事が進むと思っていたからであろう。銀十タラントと金六千シケルと晴れ着十着 診断を求める際に贈り物をするのは慣例で

あったが、これは例外的な豊富さであった。

7 イスラエルの王は：衣を引き裂いて言った ツァラアトのいやしは人間的には不可能なものであったゆえに、これ無茶な要求と感じ、戦争の挑発と受け取ったのであろう。膨大な贈り物を携えて行ってもイスラエルの王の恐れを和らげることはできなかった。

8 あなたはどうして衣を引き裂いたりなさるのですか エリシャはイスラエルの王の不信仰を指摘している。イスラエルに預言者がいることを知るでしょう これはエリシャというよりも彼を通して働いておられる神の存在が知られるようになることを意味している。そして同時に、他の神々が無力であることを示す機会にもなるのである。

11～12 ナアマンは激怒して去り ナアマンは自分なりに、どのような方法でいやしがなされるのかを思い描いていた。しかしエリシャの要求はナアマンにとって予期せぬ要求であり、彼が自分の前に姿さえ現さなかったことを無礼に感じたのである。ダマスコの川：は、イスラエルのすべての川にまさっているではないか ナアマンが怒ったのは、ダマスコの川がヨルダン川と比較して立

派な川であるという理由もあるかもしれないが、真の理由は、自分をへりくだらせて神の方法に従うことに気が進まなかったことであつた。ヨルダン川が用いられたのは、いやしは川の水ではなく主がなさるものであることを示している。エリシャの命令はナアマンに謙遜と信仰を教えるためであつた。

13 わが父よ。難しいことを、あの預言者があなたに命じたのでしたら、あなたはきつとそれをなさったのではありませんか しもべたちの訴えは理にかなっていった。ナアマンは自分の病気が重いため、簡単な方法でよいはずがないと思つたのかもしれない。しかしこの病のいやしは困難であり、神の力でなければ不可能であるので、ナアマンが考えるどのような困難な事をしてでも決していやすことはできなかったであろう。だからこそ神の恵み以外の方法に期待はできないのである。ナアマンの発想は自分の苦行に頼るもので、福音とは異質であつた。

14 神の人が言つたとおりに いやしは神に従うこととからくる。七回 七は完全数。同じことを繰り返すのは信仰が試されることでもあつた。

参考図書 8月21日分と同じ。

聖書

ヨナ1:1-17

タイトル

神に背いたヨナ

暗唱聖句

私は、海と陸を造られた天の神、【主】を恐れる者です。ヨナ1:9

目標

神に背いて歩むことの災いを覚え、喜んで神に従う。

導入

(土屋開夫)

皆さんは、「もうこんな家、嫌だーっ。家出してやるーっ」と思った事がありますか？

私があります。中学生の時、お父さんが色んなことを押しつけてくるのが嫌で、もうガマンの限界！ 自転車に乗って家を飛び出しました。そして親戚のおばさんの家に行こうとしたのですが、何時間も走って、足はつるし、夜になって真っ暗だし、自分がどこにいるのかも分からなくなっちゃうし…。泣きそうになりながら、「神様、助けてっ」と心の中で祈りました。

そして、「そうだ、おばさんに電話しよう」と思って、車で迎えに来てもらいました。その時はとてもホッとしてました。一晩、泊めてもらって気が済んだのか、次の日

は家に帰りました。

今日の聖書箇所に出て来るヨナさんも、家出をしたかったのかも知れません。

逃げ出したヨナ

ある時、神様は預言者のヨナさんに、アッシリアという国のニネベという都に行き、神様の言葉を伝えるように言われました。

ヨナさんはアッシリアの国が大嫌いでした。自分の国イスラエルを苦しめる敵の国ですし、とても悪い人たちだったからです。そんな所に行きたくもないし、万が一、憐み深い神様が、彼らの罪を赦される、なんて事になったら、最も最悪だと思ったのです！

そこでヨナは船に乗って、神様が「行け」と言われたニネベの都とは反対方向に行こうとしました。

ところが、神様が大嵐を起こされたので、船は沈みそうになりました。船の船員たちは、「だれのせいだ、このわざわいが私たちに降りかかったのか、くじによって知ろう。」と言いました。そして、くじはヨナさんに当たりました。神様が当てなされたのです。

もはや逃げも隠れもできないと思ったヨナさんは、言いました、「私は、海と陸を造られた天の神、【主】を恐れる者です」(9)。そして、自分が主なる神様の前から逃げようとしている事を、正直に話しました。

「主を恐れる」とは

ヨナさんは、「私は…【主】を恐れる者です。」と言いました。でも、そう言いながら、主なる神様に従わず、神様から逃げ出しました。言ってる事と、やってる事が違うように思いますね。

「主を恐れる」とは、どういう意味でしょう？ ただ単に「神様って怖い、恐ろしい。逆らったら何をされるか分からない。滅ぼされてしまうかも知れない。だから、恐いから仕方なく、ビクビク従っておこう…」そんなふうに恐がる事でしょうか？ 違うと思います。私たちがそんなふうに神様を恐がっていても、きっと神様はちつとも嬉しくないでしょう。むしろ悲しく思われるでしょう。

確かに、主なる神様は、罪に対して厳しいお方です。でも、罪を心から悔い改めるならば、どんな罪のある人

でも「赦したい」と願われる、憐み深い神様なのです。

この後、海に放り出されて海の底に沈んでいくヨナさんを、神様は大きな魚に飲ませて救われました。きっと神様はヨナさんとじっくりお話をしたかったのではないのでしょうか。親子の会話のように。神様の深い気持ち、お心をヨナさんに伝えたかったのだと思います。

「主を恐れる」とは、ただ恐がることではなく、主なる神様、父なる神様を深く信頼することだと思います。

神様とお話しよう

皆さんもしかしたら、時に、神様から逃げ出したくなったり、勝手に腹を立てたりする事があるかも知れません。そんな時は、神様と、とことんお祈りでお話するいいと思います。やがて前よりもっと深く父なる神様を信頼できるようになるでしょう。神様も私たちもっとお話したいと、願っておられる事でしょう。

♪祈ってごらんわかるから♪

(PW7、イン70、GS35、新聖歌481)

聖書 ヨナ1・1～17 テーマ 神に背いたヨナ

序論

(石田高保)

ヨナの預言者としての行動には不従順がありました。しかしそれでも神は諦めずに彼を用います。そのように私たちにも関わっておられると見ることができます。

一、神から離れようとする人

〈立つてあの大きな都ニネベに行き、これに向かって叫べ〉、つまり悔い改めを宣べ伝えよと主からお声がかかった時、ヨナはどうてい受け入れることができませんでした。なぜならヨナの祖国イスラエルは、その北方に位置するアッシリアに圧迫されており、ニネベはその首都だったからです。ヨナがその町に神の言葉を伝えて人々が悔い改めでもしたら、敵を救うことになってしまふことを恐れました。そこで反対方向のタルシシュへ船で渡ってしまおう、そうすればこの従いたくない使命から逃れられると考えたわけでした。

渡りに舟とばかりに、〈タルシシュ行きの船を見つけると…それに乗り込み〉。自分の願ったように事の運ぶ

ことが、必ずしも主のみこころとは限らないことがあります。むしろ自分の願いを正当化するために利用しかねません。ヨナの場合は三度も〔主〕の御顔を避けてと書かれていますから、それがはつきりしています(3、10)。しかし主は私たちが大きな過ちをしないように、み言葉や助言者を備えておられます。

人間は神様に与えられた自由意志によって、神の言葉に従うことも、従わないこともできます。神様は人間を強引に従わせることはなさいません。しかし摂理の中でみ言葉に従い、祝福にあずかるようにと道備えをなされます。〔主〕が大風を海に吹きつけられたのもその一つの現れです。

二、追ひ求める神

〈私は、海と陸を造られた天の神、〔主〕を恐れる者です〉という告白に船乗りたちが震え上がったのは、ヨナが海を支配する神に背いたことを悟ったからです。そして〈何ということをしたのか〉と、異邦人たちから過ちを責め立てられては、ヨナも恥じ入り、ついに本当のことを言いました。〈この激しい暴風は、私のせいであなたがたを襲ったのです〉、ヨナは、この絶体絶命の状況を

招いたのは、自分が主の命令にそむいて逃げたせいであることを自覚しています。当時の船乗りたちは、人を海に投げ入れて神々への犠牲とすれば、その怒りがなだめられて暴風が収まると信じていました。それを知っていたヨナは自分を犠牲にしてくれと申し出るのです。船乗りたちはできるだけその手は使いたくなかったので、船をこいで陸に戻ろうとがきました。しかし万策尽きたとき彼らはやむを得ずヨナを海に投げ入れました。するとたちまち大嵐が嘘のように静まりました。これには船乗りたちも恐れおののき、ヨナの神がまことに天地を造られた神だと認めざるを得ませんでした。皮肉にもヨナの不従順な行動を逆手にとって主が栄光を表されることとなりました。

いっぽう海に投げ込まれたヨナと言え、思いがけない方法で命拾いします。〔主〕は大きな魚を備えて、ヨナを呑み込ませた。しかも三日三夜その魚の腹の中で生かされ、おそらく元の海岸まで運ばれて生還します。主は大嵐を起こしてヨナを危険にさらすだけではなく、大いなる魚を用意して彼の命を救われました。一見ありえないことのようにですが、イエス様はご自分が死人の中

から三日目によみがえると預言するにあたって、ヨナの出来事を引き合いに出しておられることから、まぎれもなく神の御手が働いたことがわかります(マタイ12:40)。ここにはどんな方法を使ってもヨナを預言者として用いて二ネベの人々を救おうとする主の熱心が表れています。同じように自分を愛するように身近な人を愛し、福音を伝えるという使命のために用いられない人はいません。主は私たちを何度でも働きに招いて下さるのです。

結論

神様の前を離れる、それはあつさり、あるいはざりざりのところで神の言葉よりも自分の思いを選び取ってしまう傾向と言えるでしょう。また神様の使命に従いきれない心の状態を指しているのかもしれませんが。しかし私たちは聞こうとさえすれば神の声を聞くことができます。聖書を読んでいる人、メッセージを聞いている人は、すでに神の声を聞いていると言えるでしょう。あとは従う仕事だけが残っています。それは誰も代わることができません。しかし神の声を聞いて従うという営みには、必ず祝福があります。その人はいつも喜んでいられるだけでなく、身近な人に良い影響を与えるようになります。

研究資料

(小平徳行)

本書には異邦の民をあわれむ神の愛と共に、一人の預言者ヨナを忍耐強く取り扱われる神の愛が描かれている。

テキスト

1 アミタイの子ヨナ ヘブル語で「鳩」という意味。

Ⅱ列王14・25によれば、ヨナはヤロブアム2世の領土拡大について預言した北イスラエルの預言者として登場している。父親の名が同じであることから、本書のヨナと同一人物であると考えられている。

2 ニネベ ティグリス川東岸にニムロデによって築かれ(創世記10・11)、メソポタミアにある最古の町の一つ。アッシリア王国の主要都市でセンナケリブ王によって首都と定められた。後にメディアとバビロン連合軍によって滅ぼされる(BC 612年)。向かって(ヘ)アルこの前置詞は何か「逆らって」という意味があり、異教の地ニネベに対する宣教の厳しさが表されている。預言者ヨナの使命は異教の民ニネベの罪に対して立ち向かい、彼らに罪の悔い改めを訴えることであった。

3 ヨナが使命を放棄した動機はニネベの宣教の困難さより、4・2のヨナの告白から分かるように、彼の宣教によってニネベが悔い改め、神が災いを思い直されるのではないかという恐れからであった。ニネベはイスラエルにとって脅威となるため、ヨナとしては滅びることが望ましかったのである。彼は臆病だったのではなく、偏狭な愛国心から神に従わなかったと思われる。しかし、理由はどうであれ、主の命令に従わなかったことは良い事ではない。タルシシュ どこを指しているのかは諸説あるが、通常は現在のサルジニアか、あるいはスペイン南部のタルテスと同定される。ここはヨナの時代のヘブル人たちに知られていた最も遠く離れた貿易相手であった。いずれにせよタルシシュは海を隔てた遠隔地であり、「世界の西の果て」という響きを持つ表現としても用いられている(詩篇72・10、イザヤ66・19)。ヨナがタルシシュ行きの船に乗り込んだのは、神の召命を逃れて、できるだけ遠方に行こうとしたためである。ヤッファ地中海沿岸にある港町で、エルサレムの北西56kmにある。現在はテル・アビブと合併。

4・5 神への不服従は当人だけでなく、周囲の人々に

も損失をもたらすことがある。それぞれ自分の神に向かつて叫んだ。水夫の国籍が様々であったのか、またはフェニキアなどの多神教国の民で、各自の守護神がいたのかもしれない。積荷（ヘ）（ケ）（リーム） ただの荷物だけでなく、船具をも指す。事態がいかに切迫していたかを思わせる。船底に下りていて 現実から少しでも遠くへ逃れようとする試みであり、神からの逃避であった。ヨナは嵐の原因が自分にあることを知っていたながら、あくまでも神から離れようとする愚かな試みであった。

7 くじによって 直訳は「くじを落とす」。くじ（ヘ）（ゴール）はアラビア語の石と関連のある語であることから、いくつかの小石が用いられて、ある特定の一つが落ちることによって決められたのであろう。くじで神のみこころを知ろうとするのは、ユダヤ人を含め、広く古代の人々の間で用いられていた。旧約聖書でも多くの例があり、正当な方法とされていたことが分かる。

9 ヘブル人 イスラエルの民が他の異教の民との区別を意識した呼称。海と陸を造られた天の神 今、海が荒れているのは、この神の怒りのゆえであることにヨナは気づいていた。

- 10 非常に恐れて 水夫たちがひどく恐れたのは、イスラエルの神が自分たちの神々とは比較にならないほど恐ろしい神であるという認識によるものであった。
- 12 私を抱え上げて、海に投げ込みなさい ヨナには荒天の原因になっている自分がこの船にいないければ、船は助かるに違いないという確信があった。
- 13 ヨナに同情した水夫は、何とか彼が犠牲になることを避けようとして、舟を陸に戻そうとしたが、不可能であった。罪の赦しは犠牲なしにはあり得ない。
- 16 この異教の民の反応は、彼らのうちに、イスラエルの神に対する畏敬の念が起こされたことを示している。
- 17 大きな魚を備えて、ヨナを呑み込ませた これが歴史的事実でないとする解釈や、類似の事件が実際に起こったことを指摘して、信ぴょう性を裏付けようとする論議も展開されてきたが、類例が見いだされなくても、全能の主がなされた超自然的御業と考えるべきであろう。
- 参考図書 鈴木昌「ヨナ書」『新聖書注解・旧約4』（いのちのことば社）、勝原忠明「ヨナ書」『実用聖書註解』（いのちのことば社）、W・R・トンプソン「ヨナ書」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇4』（イムマヌエル綜合伝道団）他

聖書

エレミヤー・1〜10

タイトル

エレミヤへの召し

見よ、わたしは、わたしのことばを／あ

なたの口に与えた。

エレミヤー・9

目 標

神の召しを覚え、その召しに従う者となる。

導入

(後藤 真)

みなさんは将来何になりたいですか。いまから得意なことを伸ばしたり、勉強をがんばったりして、準備している人もいるかもしれませんね。

きょうの聖書はエレミヤという人が、神様から語りかけられて預言者になったときのお話です。エレミヤは預言者になりたくて学校に行ったとか、習い事をしたというわけではありません。預言者は自分がなりたいからなるというのとは違う、特別な働きなのです。

預言者のはたらき

エレミヤが預言者になったころ、イスラエルはとても大変なことになっていました。アッシリア、バビロン、

エジプトといった大きな国に挟まれ、攻められ、滅ぼされそうになっていたのです。

もしみなさんが、自分の住んでいる国が戦争に巻き込まれ、大きな国から滅ぼされそうになっていたらどんな気持ちですか。こわいですよね。いまどうなっているのか、これからどうなるのか心配になりますよね。

こんなとき神様は「いまどうすればよいのか」「これからどうなっていくのか」ご存じです。でも、旧約聖書の時代は、教会に集まってみんなでお祈りし、神様の思いを求めるといことはありませんでした。そこで選ばれているのが預言者です。預言者は神様のことばを預かって人々に伝える仕事です。神様はこの大切な働きのためにエレミヤを選んだのです。

神様が選ぶ

神様はエレミヤに語りかけました。

「わたしはあなたが生まれる前からあなたを知って、世界の国々に神様のことばを語る預言者になるように特別に選び、決めていた」

何ということでしょうか。神様はエレミヤがどんな人

9月

25日 礼拝メッセージ例

になるのか、お母さんのおなかで赤ちゃんとして育つ前から知っていたのです。そして、生まれる前から預言者にすることを決めていたと言うのです。

こんなことふつうはありません。大谷翔平選手が、生まれる前から世界一の野球選手になると知っていた人はいません。神様だけが、わたしたちをこんなに詳しく知ることができます。預言者は自分で立候補してなるものではなく、神様を選んでならせるものです。

エレミヤはびっくりして言いました。

「ああ、神様。見てください。わたしはまだ若くて、どう語ってよいかわかりません」。

神様がことをくださる

神様はエレミヤに言いました。

「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすから、遣わされたところに行きなさい。そして、あなたに命じるすべてのことを語りなさい。人々の顔を恐れるな。わたしがあなたといっしょにいてあなたを救い出すから」。

預言者は相手がどんな人でも神様のことを伝える人です。相手が自分より偉くて、強いとき、神様のことを

を伝えるのにとっても勇気がいるでしょう。だから神様がいっしょにいて勇気を与えてくださるのです。そしてエレミヤに語ることを教えてくださるのです。

神様は手を伸ばしてエレミヤの口に触ってくださいました。そして、

「見よ、わたしは、わたしのことをあなたの口に与えた」と言いました。

エレミヤは覚悟を決めて、預言者として、神様のことを語る人になっていきます。

みなさんはエレミヤのような預言者になりなさいとは言われなくてもいいです。でも神様はみなさんにも大切な働きを任せてくださいます。友だちや家族に優しくすることや、イエス様のことを伝えることもその一つです。神様がしてほしいと願うことを、喜んでできる人にしていただきます。

♪輝かせよ♪(PW41、イン87)

聖書 エレミヤ1・1～10 テーマ エレミヤへの召し

序論

(石田高保)

エレミヤはユダの祭司の家系に生まれた人で、預言者として半世紀に及んで活動しました。その間にイスラエルの大事件であるバビロン捕囚がありました。彼は、そのことを正確に預言しています。今日の箇所は彼が預言者として召されたときの出来事を記しています。およそ二十歳くらいの時と考えられます。

一、神の召しの確かさ

エレミヤにある日、神様の召命のことが臨みます。へわたしは、あなたを胎内に形造る前から／あなたを知り、あなたが母の胎を出る前からあなたを聖別し、国々への預言者と定めていた」という言葉には目を見張りま。エレミヤの預言者としての召しは、彼が生まれる前に定まっていたというのです。いわば天職ということになるでしょう。神の主権により、エレミヤには預言者になるかどうかという選択の余地はありませんでした。彼の生家は由緒ある祭司の家系で、そこに神の摂理が働い

ていたと考えることもできるでしょう。「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもつて召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自分の計画」に基づいています(Ⅱテモテ1・9)。そのように見ると自分の意志を働かす余地がなく、とても不自由に見えますが、別の観点からすると彼の預言者としての務めは神様の強力な保証と責任のもとに行われるということになります。彼は神様の特別な働きのために聖別されました。まさに「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び」(ヨハネ15・16)とあるとおりです。イエス様も弟子を召し出したとき、相手に相談することはなく、一方的にお選びになっています。

ところが神様の召しに対するエレミヤの応答は、〈あ、【神】、主よ、ご覧ください。私はまだ若くて、どう語ってよいかわかりません〉というものです。彼の本心はこのとおり、まったく自信のかけらもありませんでした。イエス様の母マリヤが受胎を告知されたときの反応に通じるものがあります。しかし神様の声がたたみかけます。〈まだ若い、と言うな〉というものです。神様にとって若いかわか熟しているかは問題ではないようです。

むしろ若いことによつて長期間にわたつて預言者として働くことができることを神様は見越しておられたのでしょうか。〈彼らの顔を恐れるな。わたしがあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ〉と神様は命令するだけではなく、臨在の保証をもつてエレミヤを励ましておられます。

さらに神様はリアルな幻によつてエレミヤの預言者として任命します。それが〔主〕は御手を伸ばし、私の口に触れ〜という行為です。神ご自身が手を伸べてエレミヤの口に触れてくださいました。神様が彼にそのつど預言を与えると保証してくださいという意味です。これはひるむエレミヤへのだめ押しです。彼はついに降参し、主の召しを受け入れました。これ以降の彼の言葉には神の力が与えられます。〈見よ、わたしは、わたしのことばをあなたの口に与えた〉このことがあつてから、エレミヤが主の霊に満たされて語る言葉は、神様からの預言となりました。あなたに〈引き抜き、引き倒し、滅ぼし、壊し、建て、また植え〉させると、神の権威によつて語る言葉が現実生きて働くことを保証したものでしょう。

二、私たちへの神の召し

では、現代において神様の召しはどのような形で行われるのでしょうか。まず人が救われるということにおいては神様の召し（招き）が大前提です。人はその上に意志を働かせてイエス様を受け入れ、救われるのです。

また信徒として教会の働きへの召しというものがあります。人から頼まれたとしても、その背後に神様からの召しがあることを覚えて行いたいものです。

さらに教会の枠を超えて、日常生活での召しというものもあります。家族や職場の人や友人、地域の人に仕えるという召しです。自分を愛するように隣人を愛することを実践する場です。それは証しの生活であり、折に触れてイエス様を伝えることでもあります。

また牧師、伝道者、宣教師への召しというものがあります。牧会、伝道、教会開拓のためです。いわゆる直接献身への召しというもので、胸の内に神様からの召しを覚えたら、み言葉を求めて確信を得ましょう。

結論

神様の召し、それは神様の保証による確かなものです。それに従う人に愛と知恵と力を与えてくださいます。

研究資料

(金井由嗣)

時代背景

南王国ユダの王ヨシヤの第13年(紀元前627年)から、エルサレムが陥落した紀元前587年までが、エレミヤの預言活動がなされた期間である。

(1) 宗教的背景

ヨシヤ王の第18年に神殿から律法の巻物が発見され、それに基づく宗教改革が実行された(Ⅱ列王22～23章)。この改革の内容から、その時発見された書物は「申命記」であつたと考えられている(申命記改革)。ヨシヤ王の改革は彼の死によって中断し、イスラエルは再び偶像礼拝を許容する王たちの支配を許し、国の滅亡に至る。その中で、主との契約に立ち返ることを主張し続けた預言者が、エレミヤであつた。

(2) 政治的背景(Ⅱ列王23～25章、ファイファー参照)

東方のアッシリア(後にバビロニア)と南方のエジプトという二大帝国に挟まれた小国の悲哀を味わたのがユダ王国であつた。ヨシヤ王は宗主国アッシリアへの忠誠の証としてエジプトの大軍に挑んで戦死した。エジプ

トに擁立されたエホヤキムは、バビロニア軍が迫るとその傘下に入ったが、後にまたエジプト側に付いたためにバビロニア軍の攻撃を受ける中で死去し、後を継いだエホヤキン捕虜となつてバビロンに連れて行かれた。ゼデキヤが王となつたが、国内では親バビロニア派と親エジプト派が主導権争いを続け、最終的にエジプトを選んだためにバビロニアの攻撃を受けてエルサレムは陥落し、国は滅んだ。この複雑な情勢の中でエレミヤは、国の滅亡を宣告して、バビロニアに降伏し、捕虜となつて、連れて行かれた先で主への信仰を回復するようにと、王と民に勧めた。彼の言葉はゼデキヤ王やその周囲の人々に嫌われ、民衆からの反感にさらされた。

テキスト

1 ペニヤミンの地、アナトテにいた祭司 ダビデ王のもとで祭司だったエブヤタルは、ソロモンによつて罷免されアナトテに住んだ(Ⅰ列王2・26)。地方の祭司職がエレミヤの家系であつた。ところが主は、彼を祭司としてではなく預言者として召されたのであつた。

4 次のような「主」のことが私にあつた 預言活動を開始したヨシヤ王第13年に語られたものであろう。

5 三つの動詞で簡潔に、エレミヤへの召しが語られる。知り、…聖別し、…定めていた いずれも完了相であり、「胎内に形造る前から」「母の胎を出る前から」との言葉と合わせて、この召命が神の側では決定済みであったことが宣言されている。国々への預言者 新共同訳と聖書協会共同訳は「諸国民の預言者」。エレミヤの預言がイスラエル民族の枠を超えて他の諸民族にも向けられていくことを告げる。

6 私はまだ若くて 召された時のエレミヤはまだ若かったことが分かる。どう語ってよいか分かりません は彼の本心であろう。

7 まだ若い、と言うな 神の召命は、人間の事情に優先する。わたしがあなたを遣わすすべてのところへ行き、わたしがあなたに命じるすべてのことを語れ 「すべてのところ」(ヘ)アル・コル・アシエル)を聖書協会系諸訳はエレミヤが語る相手の「人」と解釈する。エレミヤは相手の身分や立場に関係なく、神のことはを、権威をもって語らなければならない。

8 彼らの顔を恐れるな 王や祭司といった支配階級の罪を断罪する彼の預言活動は、恐れを抱いて当然のもの

だった。わたしがあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ 人への恐れに打ち勝つ拠り所は、神の臨在の信仰である。

9 わたしのことをあなたの口に与えた 預言者の言葉は、神ご自身の言葉である。

10 諸国の民と王国の上に「諸国の民」は5節の「国々」と同じ単語。「万国」は「諸王国」と訳せば良い。前者は民、後者は支配者に焦点を当てた表現である。引き抜き、…植えるために 6つの動詞でエレミヤの預言がもたらす結果を表すが、破壊的な動詞が4つ、建設的な動詞が2つである。エレミヤに与えられた預言は「破壊の後の回復」を告げるものであり、厳しいメッセージであった。支配者も、民の多くも、もっと聞き心地のいい預言を聞きたがった。しかし現実には国が減った後で、亡国の民の心の支えとなったのはエレミヤの真実な預言だった(ダニエル9・2)。

参考図書 マグラス『エレミヤ―真実の預言者』、服部嘉明(新聖書講解シリーズ)、ハリソン(ティンデル)、クレメンツ(現代聖書注解)、ラハ(同スタディ版)、ファイファー『旧約の歴史』。

牧羊ひろば



那覇平安教会 教会学校

●はじめに

那覇平安教会是那覇市古島にあります。古島は周りにマンションやビルが立ち並ぶ都会です。子どもも多く、塾や学校もあります。ただ教会学校は、信徒の子どもたち3人がレギュラーメンバーで、時々もう2、3人が加わるほどの小さな働きです。それでも若い夫婦の方々に赤ちゃんが与えられ、小さいながらも教会学校を続けていく事が出来そうなのは神様の憐れみです。私が那覇に赴任して2年ほどの教会学校の働きを中心にご報告いたします。

●月一回の親子合同礼拝

毎月初めの聖日は親子合同礼拝をもっています。10時半からの礼拝に赤ちゃんから高齢の信徒にいたるまでみんなで参加します。賛美は子ども賛美を、説教は年度の教会標語の基ついたテーマ説教となっています。



大人も子ども一緒にお祈り

二〇二〇年度は「主の祈りを自分の祈りとする」というテーマで、主の祈りを祈れるようになることを目標にしました。「主の祈りチャレンジ」と称して、3回まで「お助け」を使えることにして、祈れた子には豪華？商品プレゼントしました。「祈りがわからない」という人もいましたが、おおむね主の祈りは覚えてくれたようで、

祈れるようになったことが嬉しいです。

二〇二一年度は「ひとりひとりが神の家族」というテーマにしました。沖縄は家族関係の絆がとて強く、沖縄県内であれば子ども、孫が実家に毎週のように遊びにいき、孫の面倒をおじい、おばあ（祖父、祖母）がみるのは、ほぼ当たり前という文化があります。その文化の中で「じゃあ神の家族とはどんな意味だろう」家族みんなで分かち合えるようにしたい思いから取り組みました。説教内容は、小学校高学年の子にもわかるようにパワーポイントを用いながら説教しています。子どもたちに感想を聞いても「普通」というコメントを普通のテンションでしか返してくれないので、こちらは不安がありました。だが、どうやら今の子どもたちは「普通」は「まずまず良い」という意味で使うらしいので安心しました。「普通」に届いているようです。本当は「驚くばかりの恵みだよ」といいたいところですが、慌てずコツコツと恵みを積み上げていければと思います。コロナ禍で許されている範囲で、一緒に遊んだり、ご飯を食べに行ったり、家族ぐるみの交わりができ感謝でした。ミニウサギのラビちゃんも子どもたちの交わりにだいぶ貢献してくれま

した。（写真参照）

来年度二〇二二年度は教会標語を「ひとりひとりのチョイス！」としました。聖句は「ただし、私と私の家は主に仕える。」（ヨシユア24・15）です。家族としても、個人としても主に仕える選択、チョイスができるように願っています。お家時間においても、ゲームをしているときでも、友達と遊んでいるときも、「チョイス！あなたの選択！」テーマソングに合わせて、チョイスができるように願っています。ユーチューブで「賛美 チョイス」と検索すれば聞けます。



ラビちゃんと子ども

●毎週の教会学校

教会学校は毎週日曜日9時15分からです。主に順子先生がメッセージをしています。パワーポイントやYouTubeで配信されている賛美を用いながら、飽きさせないよう話しながらしています。しばらくコロナ対策のため、YouTubeでの配信となりました。子ども



教会学校の子どもたち



母子室での様子

たちに話しかけながらメッセージしていた順子先生はとてもやりづらいいっていました。大人もオンラインだけでは物足りなさを感じることはありますが、子どもの場合は集中して聞けなかったり、時間どおりに集まれなかったりします。オンラインでもせめて顔の見えるズームやラインでの教会学校にするか、今検討中です。

クリスマス会などは感染対策をしつつ、赤ちゃんなども参加できる機会としてリアルで行いました。この集会を機に、普段の教会学校にも参加できるように、また教会学校の奉仕者が与えられるように願っています。

●近所の子どもとの関わり

近所のI君は小学生の時から教会に遊びに来ています。今は中学3年生で、高校に無事合格が決まりました。「俺受かったよ!」とメールをくれたので嬉しく思いました。友達を連れてきたり、一人できたりします。ご飯やおやつを食べゴロゴロ寝ころびながら母子室で遊んでから、最後に聖書のお話を聞く時間を持っています。礼拝に来てくれるようになり、今では礼拝に出られないと「ごめん」と謝ってくれるようになりました。本人なりに聖日礼拝が大事であること、イエス様を信じる信仰が大事なことをわかっているようです。お母さんから大人になるまでは洗礼を受けないでと言われているようですが、もう自分で色々決められるようになってきていますので、洗礼を受ける日も近いと個人的には考えています。I君が教会についてコメントすることがあります。



リップスティックで子どもと遊ぶ

「もっと(教会が)ウェルカムな感じがいいと思うよ」とか「説教の中で」先生の(個人の)話をもっとして」とか他愛もない会話です。ただ私自身が怖い顔をして教会の敷居をあげないように笑顔でいようと、か、私自身の話を説教に多めにしようとか気づきを与えられました。

子どもたちの声は、言葉足らずであったり、論理的で



クリスマスも半袖です

なかったり、馬鹿らしく思えることがあります。でもその中に、神様からの語りかけが確かにあるように思えます。イエス様が幼子を招かれた（マタイ18章参照）のも、幼子と共に過ごすことを私たちに求めておられるように思います。そのためにできることは、私たちができる限り寄り添い一緒に時間を過ごしてあげられるようにと思います。子どもたちには何もしゃべらなくても、ただ一緒にいて遊んでくれたその時間が居場所になっているように思います。私たち大人はいかに効率よく充実した時間を過ごすかを考えます。また短い時間にスケジュール

を詰め込むことで満足します。それが大人の時間軸です。でも子どもの時間軸で生きるようにイエス様が招かれる時があります。その時は素直な心で子どもの時間軸で過ごすことができるように、私自身も目指していきたいです。

（石川剛士）

*ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセー ジ例	飯田勝彦師	今田雅子師	和田牧子師
聖書講解	後藤 真師	櫻井めぐみ師	土屋開夫師
研究資料	宮澤清志師	小泉 創師	石田高保師
	鎌野善三師	福井文彦師	高橋頼男師
	小平德行師	宮澤清志師	辻林和己師
	加藤 満師	金井由嗣師	中島啓一師
(A) ワーク	鎌野 幸師	吉田美穂師	宇野真佑美師
(B)	石川剛士師	山下大喜師	三輪直子師
(C)	勝田幸恵師	野勢かほる師	
	八幡直人師	上森恭子師	田中裕明師
	勝田幸恵師		
中高科へのヒント	三輪正見師	石田高保師	後藤健一師
子ども聖書日課	小野淳子師	金田ゆり師	田中愛子師
フラッシュカード	柴田福音師	後藤栄子師	丹羽 遥姉
	松浦あん姉		
み言葉カード・イラスト	柴田福音師	後藤栄子師	丹羽 遥姉
	松浦あん姉		
ワープロ打ち込み	多田豊子師		
校 正	後藤健一師	中島啓一師	

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、組版の松木共栄印刷、印刷のプリントパックに心から感謝いたします。(中島啓一)

二〇二二年七月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団
企畫監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三―一―一九
電話 (〇七八)五七五―一五二一
FAX (〇七八)五七五―一六六一
印刷所 株式会社プリントバック

*聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号4-2-750号